青鞜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

十一月號目次

人形（詩） 一 望月れい

紫玉 ブシブシエフスキイ作（飜譯） 四 瀬沼夏葉譯

旅の附錄（小說） 一一 米川文子

山のおもひで（短歌） 三九 三ケ島葭

獵人 オリーブ・シユライネル（飜譯） 四二 山田わか譯

御宿より（手紙） 五〇 らいてう

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

達摩さま（小說）　五九　安田皐月
山と海と（日記）　八六　川田よし
わかれ（短歌）　一〇三　齊賀琴
人間と云ふ意識（感想）　一〇三　伊藤野枝
結婚に就いて兩親へ　一〇九　岡田わか
松本悟郎氏に答ふ　一一二　野枝
編輯室より　一一四　野枝
表紙（自書自刻）　奥村博

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人形——望月れい

秋の日ざしあかるき
障子の桟に枕する
ふたつの人形
ひとつの眼ばあがるく
ひとつの瞳はうるめり

柳と櫻そめぬける
銀糸まじりの小ぎれにて
きぬをつくりてきせばやと思ふ
おやゆびほどの人形の
右の手にむしのはみたるあとあり

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

夢むばかりに

浮き藻に似たる髮のながれ
いのちのきはみうるはしき
とことはのさかりの君を
夢むばかりにのぞみもせず

月の光のさしいる花ぞの
よそ心なき花とおごれる
とこわかの戀の君を
夢むばかりにのぞみもせず

たすき

たすきかくるになれしそで

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たすきはづせばさみしさをおぼゆ

夜

折り目たゞしきはをりを
單衣にかさねてきたる夜
ちまたの店のともしびに
むらさきのもやのかゝりて
むしのなく土をふむ
すあし冷たし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

紫 玉——プシブシェフスキイ作

彼は通に出た。息苦しくて頭も重かつた。何故か悲しいやうで、兎角に不安に襲はれた……

奈何して自分は彼女と一所になるのを、特に一ヶ月の後でなければならないやうに云つたのだらう。なに、この爲にはたゞ僅に三日の後でもよかつたのだ。

いや、さうぢやない、這麼大きい幸福を迎へるのには、さう容易にすることは無論出來ない。有る限りの自分の憂悶（トスカ）の力を集注めなければならない、又別れの盃を底まですつかり殘りなく飲み干さなければならない。何となれば此の大なる幸福の時を待つのであるから。

自分は此の幸福を、さながら俄に來つた恐怖のやうに感じなければならない。痲痺される程の驚駭のやうな感じなければならない。さうして此の幸福は必ず、恰も暴風雨の渦流に卷込まれて、それに打勝つには、其れだけの幾何かの時をさへ要する位な、猛烈な、迅速な勢を以て、彼を捉へなければならないのだ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ふと自分は停車場のプラットフォームに立つて待つてゐるやうに思つた。汽車が來た、心臓は破裂するかのやうに悸きめいた。顫えながら自分は客車から客車へと駈出して見付けた。車は際限もなく長く續いてゐる、堵の如き群衆は雪頽を打つて押寄せて來る。が、彼女を見出さない。然し彼女のあのふつくりした品の良い、美しいその全身から出るところの一種の香氣は、自分の顔を打つたかのやうに感じた、たゞ彼女ばかりが有つてゐるその特殊の匂がゆかしくした。あ、彼女だ。自分は彼女を見た、たゞほんのちらりと見たばかりだが。自分は並んで彼女と歩みながら、一言も物を云はない、互に見交しもしない。側の人間にも、押合つてゐる人込みの羽集に押されたり突かれたりされても何とも感じずに、又わいわいと云ふ喧しい叫聲も耳を劈くやうな汽笛にさへも氣が着かずに。停車場前の廣場に出て、初めて一度些と顔を見合した。さも饑ゑてゐるやうな眼で、それからは續いて幾度も幾度も、其度ごとに幸福に打顫えてゐる微笑に輝いてる眼と眼とを見合した……さうして直ぐ停車場の向ふのカフエで、自分逹は此所でこそと云ふやうに、思ふ存分にお互に顔と顔とを見合はした。

其可愛い小さい顔、彼の神經には美しい音樂のやうに響いた其の聲、其波のやうな嫋軟に活々した彼女の動作は、彼の眼に眩しい位に、全く新しいもののやうに寫つたのであつ

た……

彼は友達のところに行つた。彼等は是迄互に無二の親友だつた、幼年の頃から一所に住んで、兄弟のやうに暮して來たのだつた。友達の方では彼に對して又義務を澤山に有つてゐたのだつた。

然し今はもう先のやうな特別な親しい關係は無くなつた、今は何だか縛られてゐるやうな怯けてゐるやうな窮屈な感じがあつた。道で出遇つても、何だか變に恰も前に歩む一歩ごとに、より多く自分達を以前に增して分け隔てるかのやうに直ぐに感じた。

友達と自分との間に何か變な隔りが、たしかに出來たと彼は思つた。神秘的な新しい第三者の何ものかゞ出來たやうに、さうしてそれは自分の方に、自分から出たやうに。彼は彼の女にて全く浸され、全く貫き徹されてゐるところの、自分の躰中の細胞からも、纖維からも、躰全体からも何か變な變つたものが出るかのやうに感じた。

彼はこの空想によつて微笑した。だが彼の混雜した思想はいよ〳〵生長して行つた、擴がつた。詰り彼は彼の女によつて全く別人とされたのである。今彼にとつては彼の女より外のものは皆自分に他人のやうで興味のないもので、忌むべきものゝやうに思はれた。

自分を以て友達に信じさせることは出來なくなつた。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

一分ごとに何か堪へ切れないやうな、他人らしい隔りが出來るのを彼は感じた。さうして互の間に、其隔がだん／＼酷く擴がるやうに感じられてならない、互の間を一分ごとに限のない長い手が出て、慘酷に突離すかのやうに思はれた………

そこから歸り去つた。

外は蒸暑かつた後は雨となつた。理由もなく悲愁をもつて來る雨が冷たく降りそゝいで來た、その長い汚れた鞭で、剛情に執念く地上を打叩く。道が忽ち泥濘に化された。然し困難なのは道の惡いのよりも、心の中に苦しみの方がなほ惡かつた………

抑へられたやうな、望のないやうな、全く絶望のやうな感じが襲つて來た。

あゝ奈何したら可いか！

彼は彼の女についての憂悶が自分を捉へる時は、これが何よりも苦痛であつた。それは未だ自分が這麼切なる戀愛を尋ねて、夢想してゐて、然もまだそれを見當てなかつた日に於ての憂悶よりも百倍もまだ苦痛だつた。

今彼は彼の女のことを、自分のつひ傍に感じる時は、又彼の女の微笑が自分の神經に貫き徹つた時は、彼の女の一瞥が自分の眼に吸付いてゐるかのやうに感じられた………

一晩中彼は悲しさで惱えた、氣が遠くなりさうで胸が裂けさうであつた。荒々しい恐れ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の感情が彼の咽喉を締め付けて、何かゞ顧顳を打つて、彼の躰中で、何かゞ叫んで唸つてゐるやうに感じた……突然寢臺から彼は跳上つて、餘りの不安に夢中になつて、手を上げて物狂はしく振つた。躰は顫えて眼は燃えた……彼の女をしつかりと自分に抱へたまゝ、もう永久に離したくない！

だがたゞ一つ疑をもつことの出來ないことはこれだ。彼は今奈何しても何か仕事に着手しなければならない、奈何しても自分の藝術の前途遼遠なるところの目的に到達して、彼の女と自分との二人のものが、合さつて一つの宇宙的の我と汝とに化して了ふことを以てこの最後の存在の謎を解く所の、大なる勞働に取かゝらなければならない。

彼の有ゆる勞働の全部は、たゞ一つの我と汝とであつた。いや、たゞ彼の女ばかりなのである、彼は自分の力を彼の女から汲み取つたのだ、彼の女からは力と美とが流れて溢れてゐる。

然し彼が仕事に掛ると、いつも誰か彼を後から引止めて彼に仕事の邪魔をするやうに思はれた。

彼は思想を纒めることが出來なかつた。さうして奈何しても知らず識らず彼女と住み通した時の幸福な感じに思沈んだ。先に彼の女と共にあつた一分ごとを、彼は又新に心に思

ひ起した。彼の女の言の調子や、懐しさや、戀しさや、接吻を。彼はつひに彼の女の手紙を手に取つて讀んでは復た繰返して見た……

『私はお前と一所にゐるなら、太陽を見るのも光を見るのも望まない、たゞ私にはお前ばかり、お前が一人あれはうれしい。何の音も聞きたくない、私にはたゞお前の聲がきゝたい、あの顫えてゐる抑揚のある聲は、甘い接吻のやうに私の心臓に流れて入る。私は假令哀れな乞食になつても、食物に饑ゑても、着物は破れても、お前と一所に暮すなら、那様ことは何でもない、たゞお前の傍にゐられるなら。

手紙の上に熱い接吻をする。

と、彼は俄に胸が塞つて悲しくなつた。

他の手紙を取上げた。

『何故お前は那様に悲観してゐますか、お前は失望してゐます！　お前の手紙はどれ程私に傷ましさと、苦しさとを與へたでせう。私の心臓は破裂しさうです。もつとも私はもうそれは豫めさうであらうとは考へてゐましたが。さうして私は今はお前のところに行くことは到底出來ないのです、だがお前は那様に悲しまないで下さい、私達はまだ年が若いのですから、待つてゐることが出來るのですもの。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼は讀んでいよ〳〵悲しくなつた。彼は手紙の一句一句を嚙んで呑むやうに繰返し、復繰返して讀み、讀みながら其文句や、其語氣をつく〴〵と味ひ、又文句を一々口で呟いては復も復も返して讀んだ。で、彼は思つた、若しもこれが自分なら、自分は果して愛人に向つて恁う云ふ言を書くことが出來るだらうか、と。

彼は文句を呟きながらそれを復したが、疑は彼の心にだん〳〵と蔓延つた。それは運命に對して和することの出來るところの戀愛に對して疑惑と不信とが起つたのである。

彼は攪亂されて、苦しめられて深く深く思ひ沈んだ。不安は更に增進して、居ても立つてもゐられず、一時間餘り自分の小さい室の中を前から後へと駈け廻つた……（未完）

瀨沼夏葉譯

旅の附錄――米川文子

目が覺めた時には汽車はもう水害地へ近づいてゐた。すつかり白くなつた窓がカーテンの隙間から見えて、雨の音も聞えなかつた。誰れも起きてゐない。昨夜の紳士は、二人共元の場所へそのまゝ寢てゐた。夢のやうに、足音を聞いたと思つたのは、やはり西洋婦人のであつた。若い紳士の隣に、黑い靴をきちんと、揃えて脫いで、茶色の大きな手編の肩掛に括まつて、向ふむきになつて寢てゐた。そして眞ん中から分けた、奇麗な、黃金色の頭と、白い額と、鼻眼鏡丈が見えた。白粉の剝れた顏が氣になり乍ら、身仕度をしてゐた時に、ボーイが這入つて來た。

『皆さん、長塚でございます、何卒かお支度をお願ひ致します。』と呼び起されて、皆は驚いてとび起きた。私は始めて二十丁も泥の中を步かなければならない事に氣がついた。

『ヤ……如何です、お休みになれましたか。』

と若い紳士は寢むさうに顏をこすり乍ら云つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『えゝ、おかげ樣でよく休まれました。』かう云ひ乍ら、私は荷物の始末に取りかゝつた。手荷物は、次の驛まで荷馬車で運ばれる事になつてゐた。着物と本とがいつぱいに詰つた鞄が二つと、籐の籠と、大きな西洋人形の箱の運賃に、十圓より細かい金が私にはなかつた。

『なに、僕が一緒にすませて置きます。』紳士はかう云つて、自分の鞄と私のとを一緒にして預けてしまつた。同室の、小柄な中年の紳士も、西洋婦人も、いつの間にか見えなくなつてゐた。

『毛唐の女め――運賃も拂はないでさつさと行つちまやがつた。仕樣がないな。』

『いゝやな――先拂ひにすれば――』

こんな事を人夫達は云ひあつた。

『アヽ、お草履ですね、そいつは大變だ、これから先き二十丁も泥道計りですからね、何かいゝ工夫はないかな――』かう云つた紳士は、靴に跳ねかゝる泥を氣にして、爪立て乍ら端の方を選んで歩いた。

私はたゞ、『え……』と云つたきり、默つてごんぐ\歩いた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

眼の前に擴げられた世界は、馴れない、不安なものであつた。その麓まで霧に包まれた山が、前に迫つてゐる。道の片側の、赤黑く溢れた小川の水は、花瓣を捺られて、夕立の後のやうに泥に打たれた痕のある、小さな野菊を浸してゐた。灰汁のやうな黑く捏ね返された泥田の中には、倒れた稻が打ちのめされたやうに、細く卷きちゃれた蒼黑い葉を泥に埋めてゐる。大きな穴があいて中の棒が落ちかゝつた土橋には、新らしい板が渡してあつた。そこには友達を待つらしい、四五人の水兵が立つてゐた。私と、紳士とを見ると、ニヤリと笑ひ乍ら肩をつゝきあつた。私の方に一番近い一人は、强く押されて片足を小川の緣へ落した。

『實に悲慘ですな――。』と紳士は呟いた。

道巾は廣くなつて來た。敷かれた小石の、大方は洗ひ去られて、黑ずんだ代赭色の土は堀り返されたやうになつてゐる。遠くなつた、霧に包まれた山は、中腹まで薄ぼんやりと晴れて映つた。頭を擡げた植物の一本もない、所々水の溜つた灰色の畑が、遠く山の麓まで續いてゐる。水のぼたぼた垂れさうな、薄黑く茶色の麥藁屋根と、崩れかゝつた壁と、外はすべて灰色にあけはなされた家がある。疊のない床の上には、濁つた光りのない眼を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

こちらへ向けて、二三人の男がぼんやりと立つてゐた。道のすぐ下には、退き殘された水溜りが、大きな池になつて小川と並んでゐる。池には男の子が、跣足で細帶のまゝ釣をしてゐる。一心に、じつと糸から眼を離さなかつた。後から小さな男の子が、跣足で泥水をひちやく跳ね散し乍ら駈て來た。釣をしてゐる男の子の傍へそつとよりそつた。

池と小川との間の、流れさうに崩れかけた細い泥の畦道を、子供を負ぶつた女が歩いて行く。白つぽく赤味がゝつた灰色の頭の毛は、くしやくにつくねられてゐた。瘦せた蒼白い顏に、光りのないどんより曇つた灰色のその眼は、じつと足許を凝めてゐる。呼吸もしないやうに聲を立てない脊の子は、その血の氣の一滴もないやうな顏に、觸れると震えさうな冷たさを持つてゐる。女の步む細い崩れかゝつた畦道は、すぐ水に觸れさうである。女も、脊の子も、落ちた瞬間に呼吸は絕えさうであつた。女は、いつまでもく步いて行く。じつとその足許を凝めて――。女の前には、たゞ果しなく續いた泥の道と、濁つた水と、灰色の世界の外何もない。女は步いて行く――。小川の岸にはたつた一本殘された白楊が、その根を泥に絡らせてあえぎ乍ら蒼黑い葉を水に流してゐる。

浪江の停車場には人が溢れてゐた。勞れた蒼く薄黑い顏の中には近くの家から來たらし

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

い、折り目の見える着物に、歯の白い下駄を履いた百性女の一群も交つてゐた。

私は驛長室のドアの傍へしやがんだ。中年の紳士も、西洋婦人も、あたりには見えなかつた。

『さうやつてじつとしやがんで計りゐらつしやるのは隨分たまりませんね。それにまたかれこれ一時間も待たされるのですからね——如何です、ちよつとそこいらをお歩きになりませんか。』若い紳士はさう云つてじつと私の顏を見た。私達は、長い泥の中を一言も話さないで歩いて來た。

『私……やはりかうしてた方がよござんすから——。』さう云つて私はやはりしやがんだまゝでゐた。

『それではどんなですか一週りこの町の樣子でも見て來ませう。』かう云つて紳士は行つてしまつた。

私は、暫くたゞぼんやりとしやがんでゐた。遂々足が痛くなつて立ち上つた時、私のそゝけた頭と、蒼黑く汚れた顏が、すぐ前のガラス戸に映つた。驛長室の中の四五人の眼がじつと私に注がれてゐた。

私は靜に群集を振り返つた。物音も立てない、勞れた蒼い顏は、皆こちらを向いてゐる。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『藝者――』そんな聲が微かに聞えてきた。

私は驛長室の横手の戸をあけて表へ出た。柵の傍に褪めた、赤い、力ない花をつけた低い百日紅の葉が、丁度模樣か何かのやうに泥の痕を殘してゐた。

停車場の向側には、水に浸された跡の柱に見える宿が三四軒並んでゐる。端の家は表戸が半分あけかけてあつて、二階の雨戸を、細帶の若い男があけてゐた。

腰に手拭をぶら下げた二人の學生は、眞ん中の一番間口の廣い家へ這入つて行つた。その隣りは客で非常に混雜してゐた。

『忙しいからつて支度を斷るのは不都合だ。全体何んと思つてるのか……わざ〳〵縣廳からこの町の水害調査に出張を命ぜられて來たんだ。』こんな事を云つて怒鳴る洋服に草鞋ばきの男もあつた。

――ふと私は人形の事を思ひ出した。手荷物は故障なく着いてゐた。

赤帽を探してゐた私に、笑顏をし乍ら一人の驛夫が『こゝには生憎赤帽は一人もゐませんですが――なんなら瀛車までお運びして置きませう。』と云つたので、私はすつかり賴んだ。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は籠から出した化粧道具の箱を持つて、前の家のどこへ這入らうかと迷つてゐた。
『どうもあんまり狹いので面喰ひましたね。たつた二節程つきやないんですよ。それに今度で散々になつてますからね——。』と紳士はニコ〳〵笑ひ乍ら傍へよつて來た。
『私、そこいらでちよつと顏を洗つたりなんかしたいと思ひますからちよつと失禮致します。』と云つて私は、返事を待たないで歩きかけた。
『あ、さうですか、僕も丁度顏を洗ひたいと思つてたとこですからご一緒に何卒——。』かう云ひ乍ら紳士も急いで歩きだした。

宿屋は間口の廣い家であつた。洗ひ晒した木綿縞の單衣に、剝げた紺小倉の角帶を締めた老爺は、帶へ手をつつこんだまゝぼんやりと、何も這入つてゐないガラス戸棚の前につつ立つてゐた。脊の高い顏の長い五十餘りの女は、少ない毛を頭の眞ん中へ小さな髷で止めて、料理場と一緒にした帳場をうろ〳〵してゐた。
茶色に疊の古ぼけた六疊へ通された。床の間には置物も掛軸もなかつた。たゞ、銅製の花瓶の、花も何もないのが置いてあつた。
『お顏を洗つてらつしやい。梯子段を下りたとこの突き當りですよ。僕お先に失禮しまし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。』と、チヨツキ丈になつた紳士はかう云ひ乍ら濡れ手拭で頭をふき〳〵這入つて來た。私はいつも〳〵つき纏ふ、この紳士がたまらなく厭になつてきたので、默つて、化粧道具や鏡を持つて洗面所へ行つた。

前には、低い、灰色に晒された松の木と、やはり低い、色の褪せた百日紅の外なんにもなく、どろ〳〵した赤黑い庭土がそこら中持ち上つてゐる。鍵形になつた二階の窓には黃縞のどてらを着た、鬚の濃い、赤ら顏の男が立つてゐた。

帳場へ廻つて十圓札の兩替を賴んだ。と障子のあいた、薄暗い、梯子段の下の部屋、解き物か何かいつぱい引き散した中に、埋もれるやうにして、銀杏返しの瘦せた女が坐つてゐた。力ない、曇つた眼をちらと上げてすぐにまた伏せてしまつた。男は頭を奇麗に分けて、膝を崩して梨を剝いてゐた。

『如何です。一つ召し上りませんか。昨夜友人がわざ〳〵持つて來てくれたのですが、どうも荷厄介になつて困つちまひました。』紳士はさう云ひ乍らむしや〳〵と食べだした。

『お食事はどう致しませうか。』と障子をあけて汚い少女が顏をだした。

『入りませんね――ご飯はいらないよ。』と紳士は私の返事もきかないで、さつさと斷つて

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しまつた。あはたゞしい旅の別れに、私は昨夜食事もしないでしまつた。お腹は氣持の惡くなる程空いてゐた。

『ごめん下さい。』かう云つて私は立ち上つた。する〳〵と解いた帯の、鮮な朱の色が古ぼけた疊の上を流れた。私は床の間へ立てかけた鏡を見入り乍ら帯を締め直した。

『女の方の帯つてものはなんだか非常に苦しさうに見えますね。そして隨分厄介なものですね。』と紳士は、大きく結び上つたお太鼓の邊をじつと見てゐた。

『その模樣は大變珍らしいのですね。オヤ、それは野崎が染めてあるのですね。』と紳士は頓狂な聲を出した。

表に向つた窓からは、町の角から眼の行く限り、果しなく續いた灰色の田と畑とが見えてゐる。長い間を泥に浸された稻の根は黑ずんで腐れかゝつてゐた。一面に畦も何もなく一足踏み入れても忽ち無限の暗に引きこまれるさうに泥の田が續いてゐる。町の端れからは、何かの工場らしい高い烟突が、水に勞れた、町からも、人からも、傲然と離れて見下してゐる。

隣りの窓から、先程の學生が顔をだした。と、すぐに中をむいて、『おい〳〵。』と呼んだ。そこにまた一人顔を並べた。停車場に溢れてゐた群集はいつの間にか吸ひこまれたやうに

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

消えてしまつた。

『出かけませう。』私はかう云ひ乍らさつき女中が持つて來た十圓を、五十錢銀貨丈そこに殘しておいた。

『僕がついでに出しときますから——まアいゝですよ。』紳士はかう云つてむりやりに、私しが殘した五十錢を押しつけた。そして、自分で二十錢銀貨を、そこのお盆の上に載せた。

『お茶代を頂きました。』と少女は帳場へ告げてゐた。

『どうも有難ふござゐます。お靜にいらつしやいまし。』私は逃れるやうにその聲をききすて、靴の紐を結んでゐる紳士をそのまゝにして表へ出てほつとした。

停車場には一人の客もゐなかつた。私と紳士の荷物丈がそこに置いてあつた。

『あの男は運ぶのを忘れた——。』私はかう呟き乍ら荷物の傍へよつた。

『なアに、大丈夫ですよ。僕が運びますよ。』と紳士は云つた。荷物をすつかり運んでしまつて汗を拭き乍ら、

『どうも素的に重いですな——。』紳士はかう云つてニコ〳〵した。

狹い室の中にすぐ昨夜の西洋婦人を見いだした。中年の紳士もやはりゐた。室の一方が

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ドアになつてゐて、ソフアは三方に置かれてあつた。私と紳士とは並んでかけた。隣りには恰幅の立派な、人のよさゝうにニコ〳〵した、陸軍少尉がゐた。少尉と並んで、昨夜の中年の紳士がゐる。外國婦人は左のソフアに一人、茶色の肩掛を敷いて、片足膝へ載せてゐた。ひつたりとわけた頭はむきだされて、柔かな輪廓の正しい顏と、鼻眼鏡でまん中へよせられた、餘り大きくないその眼には一度も冷嘲を許さなかつたやうな懷しさがあつた。白いレースの、襟なしの旅行服に、鼠色のレインコートを着てあけはなした窓に頰杖をついてゐた。縁の極く狹い、黑いリボンと水色クリームの薔薇をつけたボンネットが編棚の上にのせてあつた。

私と向きあつて、銀の支那指環をはめた、服裝の粗末な老婆が坐つてゐる。それは兄の家の、いつも赤黑くてか〳〵と顏を光らしてゐる婆やにそつくりであつた。老婆と並んで垢拔のした下町風の丸髷の年增が、夢中になつて少尉と中年の紳士へ話しかけ乍ら、梨を剝いてすゝめてゐた。

『なにしろ、あなた、それこそほんとに、生れて始ての一人旅なのでございますからね――ですから到底北海道までは駄目ですわ、ま兎に角、白市で待ち合せる事に致しませうよ。』と丸髷の女は、たれともなしに二人を等分に見乍ら云つた。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『だつて君、北海道は隨分面白い所ですよ、まアそんな事を云はないで渡つて見給へ、話の種になりますよ。』少尉はかう云つてニコ〳〵笑ひ乍ら、『實の所、僕もまだ北海道へ渡つた事はないんだけれど――!。』

と少尉は聲を立てゝ笑つた。

『あなたなんかゞ一人旅が恐いなんて云つてはゐられませんよ。こちらの方なぞは、たつた一人で旭川までいらつしやるのだそうですよ。』と若い紳士は、私の方を振り向き乍ら口を入れた。

『アラ――まア左樣でいらつしやいますか。して見ますと私はよつぽど意久地なしでございますね。』と女は、眉の端を下げて、頤の下まで溝のやうに流れた齧を造つて、こちらを向いて笑つた。

『僕は先日の凌辱事件の時、丁度北京にゐましたよ。僕は實にあの腰拔野郎が腹が立つてたまらない。僕だつたらば、すぐに對手をたゝき斬つて自分は切腹しちまふんだがな――。』

少尉は人のいゝ顏に恐ろしい、意氣ごみを見せて、兩方の紳士に話しかけた。二人はその話に興味を持たないらしく。たゞ、

『は――そうですね――』かう云つて氣のない返事をした計りであつた。暫らくして二人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

は北海道の景況など話し始めた。小柄の紳士は函館の何かの會社の社長であつた。若い紳士は自分の妹婿がその會社にゐる事を話して、

『どうも實に奇緣ですな――。』と云つた。

昨夜から私は、一人で考へる間もない程、邪魔をされてゐた。北海道迄を眞直に思つて東京をでた私の旅を知つてゐる人は、私が見ず知らずの男と一緒に、寂しい、荒れ果てた國を見て來て、そして自分の行先さへ知らないやうに不安な心細さに囚はれる程淋しい心持になつて居るとは思ひも寄らずにたゞ、昨夜の汽車で、北へ、北へ進む旅人を想つてゐるのであらう。ふと寒くなつて來たので鞄から大きな駱駝織のショールを取り出した。寒さうにショールに括まる私を、じつと見てゐた西洋婦人は、につこり笑つた。そして、

『寒いでせう、こゝを閉めませうね。』かう日本語で云つて窓を閉めた。私もにつこりして會釋した。

うつら〳〵してゐる間も、いくつかの停車場を通りすぎた事を知つてゐた。

『皆さん、朝ご飯はどうなさいました。』

『え、まだなのですよ。何處の停車場でも、賣りに來ないのですね。たもらなくなりまし

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

たな――。』こんな事を話し合ふ聲を聞いた

ふと呼び聲で醒された。滊車は、可成大きい停車場へとまつてゐた。みんながてんでに辨當を呼んでゐた。私も窓をあけた。

『お辨當なら僕ご一緒に取りますよ。』窓へ顏を出してゐた紳士はかう云つた。私は默つて五十錢銀貨を渡した。紳士は默つてそれを受け取つた。

外國婦人の丈、辨當は足りなかつた。婦人は窓へ顏をだして、『辨當――辨當――』とくり返した。日本のまづい滊車辨當を喰べて見ようとする外國人に、私は自分の分を讓りたいやうな氣になつた。『私のを差し上げませう。』かう心の中でくり返して見た。

滊車が動きだした時、やつと辨當を持つて來た。一つしかなかつたお茶は、少尉が買つてしまつた。

『すつかり僕がせしめちやつた。』さう云ひ乍ち少尉は梨の返禮のつもりにか、丸髷の女にお茶をやつた。

『あなた一つお如何――』さう云つて、女は先に自分で呑んでしまつたお茶を私にすゝめた。私はたゞ輕く頭を下げた。男達はそのお茶椀で酒を呑み始めた。西洋婦人の辨當は二箸、三箸つけられたきりで、窓から投げ捨てられてしまつた。向ひの老婆は手帳を取りだして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何か書き始めた、二十五錢、空氣枕、と大きな字で端へ書いた字が讀めた。私はそこに置れてある、黑い布で蔽はれた空氣枕をそつと眺めた。いつかまたうつらくしてしまつた。『あなた、落ちましたよ。』と何か腕に觸つたので眼を開いた。外國婦人は、足許に落ちた私のハンケチを、わざく拾つてくれてゐた。私は赤くなつて俯向き乍らお禮を云つた眼はすつかり醒めてしまつた。仙臺はだんくと近づいて來た。

時々通りすぎた小川は、大方朽ちた板橋を半ば折られてゐた。濁つた水に藪の根方まで包まれて、所々白い河原をあらはした廣い川の長い板橋は、途中頃から折れて、すれ合ふ位水の上は低く垂れてゐた。人が大勢修復に取りかゝつてゐた。所々の田や畑は、水に押し流されて何一つ見えない所があつた。たゞ、泥の中を這ひまはつてゐる芋の葉は、青味を帶びて生き返る力が見えた。鼠色の、ぐざくに骨を見せた壁や、水に朽ちて拔け落ちた藁屋根の小家は、崩折れたやうに、地上に膝まづいて灰色に呼吸をついてあえいでゐた。だれも聲を出さない。深い沈默が暫く續いた。西洋婦人は青い革のオペラバックから、ナイフと、丁度鉛筆位の細さの、可成り古い色をした竹の棒を取りだした。私はいくら考へて見ても、それが何に使はれる物なのかわからなかつた。外國婦人は靜にそれを削り始め

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た。私はじつとそれを凝視てゐた。それは三十分位もつゞけられた。汽車は低い丘と、廣い平原の灰色の中を通つて、棒はいつか新らしく、丁寧に奇麗に削られてゐた。

仙臺へ着いた時は十二時すぎてゐた。此處で一日、次の汽車を待たなければならなかつた。今迄親しさうに話してゐた人達は、自分の荷物の外は、眼もくれないで出て行つてしまつた。少尉と、小柄な紳士と、丸髷の女とは改札口の所で私と、私の人形の箱を提げた若い紳士とを待ち顔で汽車の事を話してゐた、青森行は、晩の十時過ぎなければ發車しなかつた。少尉の行く盛岡までのは一時半にあつた。

『驛長がお目にかゝりますから、何卒暫くあちらでお待ち下さい。』助役らしい男にかう云はれて丸髷の女は行つてしまつた。

『遭難者の家族つてんで馬鹿に丁寧に扱つてますね。そして無賃乘車を許されてるのだからうまいや。でもあの內儀さん、まさか一等へは乘らなかつた。』と少尉は誰れにともなしに云つた。丸髷の女は、先日北海道で汽車が轉覆した時の遭難者の家族であつた。

『松島でも見に行かうではありませんか。』

『さうしてもいゝですね――。』

『それよかゆつくり御飯でも喰べた方がいゝや。』三人はてんでにこんな事を云ひあつた。私はこの群から離れて一人でゐたかつた。私はその口實を考へてゐた。

『皆さん少し後へおより下さい、只今〇〇〇〇樣のお通りがありますから。』驛夫がかう注意して歩いた。

『ついでに宮樣を拜して行かうではありませんか。』と中年の紳士は皆にさう云つた。

今まで氣がつかないでゐたあたりには、フロツクコートの紳士や白襟紋付の夫人連や學校の生徒達がづらつと並んでゐた。私達の後の方には、物々しい氣配に壓されたやうに押し默つた群集がじつとしてゐる。正裝した署長らしい人や、巡査が方々に立つてゐる。人々は今起つた來る新らしい事件をおづ〳〵した驚異の心に滿されて待ちあぐんでゐる。私はある會場に見た〇〇〇〇の立派さを思ひ浮べた。

しんとしたプラツトホームへ、きらびやかな正裝に、恐懼の頭を下げた驛長を先導で、十位の小さな男の子が、きよろ〳〵とあたりを見廻し乍ら這入つて來た。沈默は一瞬間保たれた。

仙臺ホテルは停車場の眞向ひにあつた。ちよこ〳〵とした四十餘りの番頭が、二十疊の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

廣間へ案內した。

ドアをあけるとすぐ、綺麗な金の衝立があつて、左には舶來の大きな化粧臺が据えてあつた。左に五つと、右に三つ窓がついてゐた。正面の一間半の床の間には突飛に不調和な淺黃威の鎧が飾つてあつて、床の間の左手の違棚の後の壁は庭を見下す、小さな窓になつてゐた。

私はすぐ卓に坐つて電報を書いた。そして昨夜、汽車で書いてそのまゝにした葉書を一緒にして女中にたのんだ。一人殘つた少尉が番頭に案內されて這入つて來た。と、いきなり、

『あの內儀さん、いくらすゝめても厭だつて來ないんですよ。弱つちやつた。それからそら、あの婆さんね、さんざ探したんだけど何處へ行つちやつたのか、見えなくなつてしまつた。あの婆さん、旭川かどこかの產婆だつてね。』と云ひ乍らそこへ胡坐をかいた。

『私を何處か別の部屋へ連れてつて頂戴な。』私はドアを閉めかけて番頭をさう云つて呼び止めた。

『へ――お連れ樣ではいらつしやいませんので――。』と番頭は、男達の方と私とを、じろじろ見比べて、皮肉な色を浮べ乍ら、不思議さうに私語いた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『いえ――連れは連れなのだけど――。』

『あ、左樣でいらつしやいますか。』と萬事すつかりのみこんだと云ふやうに見えた。

左へ折れてドアをあけると、廊下を隔てた、唐紙の小ぢんまりとした六疊の座敷には、小さな机と、鏡臺が置いてあつた。私は自分の爲に用意せられた書齋のやうに嬉しかつた。

二つの窓の下は炊事場に近い廣場になつてゐて、ビールやサイダーの空壜が、山のやうに積まれてあつた。

氣持の惡かつた手や顏をすつかり洗つて、着物を着更へた。私はこのホテルの奇麗なのがすつかり氣に入つてしまつた。私が人形の箱を見に始の部屋へ行つた時には、もう少尉はゐなかつた。卓の上には喰べ散らした皿がいつぱい並んでゐた。

『オヤツ――それは人形でしたね。僕はさつきから、何の箱だらうかと思つていくら考へて見てもわかりませんでしたよ。』人形の箱を調べてゐた私は、さう云つた若い紳士の方へちよつと笑顔を向けた。といきなりドアがあいた。

『どうもあの少尉さん、そゝつかしくつて。外套を忘れて行つちまつたんですよ。汽車が出かけた時に氣がついて大騷ぎして、すぐに盛岡の停車場まで送る事にしましたがね――。』と少尉を送つて行つた番頭が、手柄話でもするやうに少し反り返つて、ちよつと曲げた人

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

さし指で耳の後を掻き乍ら見くびつた口調で話した。
『ふん、そいつは弱つたろうな――奴さん、外套なしではいけないのだからね。すぐと送つてやるといゝや。』と中年の紳士が云つた。
『少尉君、一體がそゝつかしらしく見えるね。それに隨分腰を据ゑて詰めこんだからな――。』と若い紳士は何か面白さうに一人で笑つた。
『あの少尉さん、遊佐つてんですね。こゝに置いてありますよ。』と壁から外套を下して、たゝんでゐた番頭が頓狂に云つた。
『ふん、さうかい。』と二人の口調は同しやうにそろつた。私はなぜ、こんな人の群から拔け出てしまはなかつたと後悔計りされた。お茶を入れてくれてゐた若い紳士が、
『こいつがどうも厄介になつて困つてるんですよ。どうです召し上りませんか。――君一つどゥです。』と昨夜から持ち歩いてゐる水菓子を、私と中年の紳士にすゝめた。
『ね、君、松島はもう駄目だらうか――。』と若い紳士が云ひ出した。
『駄目さ。今から行つて見給へ、十時の汽車に間に合はなくなつちまふよ。』
『さうかね――、この町では別に珍らしい事もなしさ――僕達はいゝけれど折角始めていらしつたのですから、一通り町を見てらつしやいませんか。』

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『えー私はちつとも仙臺の町なんか見たかありませんから――。』私は早く、なるべく、時間が早くたつて、汽車へ乘つてしまいたかつた。見ず知らずの名も知らない人とゐて、云ひたくもない事でも返事しなければならないのが厭で堪らなくなつてきた。

『それでは僕達丈で散歩しやうぢやないか。そして面白い事があるかどうか目つけて來る事にしよう。』と中年の紳士か云ひだした。

『さうだね――ではさうしやう。それでは僕等丈で行つて見ますから――面白い事があつたらすぐ報告に歸りますから、よくお體を休めてお置きになるといゝですよ。』と若い紳士が云つた。

違棚へ腰を掛けて窓になつた所から、廣い庭を見下した。植木屋が這入つてゐる。松だの梅だの、楓だの、曲つた形の池のある冷たい暗い庭であつた。純日本式の庭と、ホテルの建物との對照は不釣合であつた。

そこからは高い建物に遮られて仙臺の町は見えない。暗い、底の、深さの知れない灰色の黒い雲は、どんよりと同じ所を動かなかつた。近い、海をさへ思つて見る事もできないやうな、霧と、深い、灰色の空氣とで、呼吸を重苦しく押へた。この周圍に、明るい、賑

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

な町と、はれ〴〵と輝いた人の顏があるとは思へない程、この部屋が、この大きな建物が、牢のやうに思はれてきた。灰色の空は、迫つてくる夕暮にだん〳〵黑味を添へてきた。每日〳〵、夕暮每に、心を暗く悲しくさせた士官學校の遠い幽などよめきが、こゝにもやはり微な響を傳へてくる。

私はふと停車場で別れた西洋婦人を思ひだした。暗い冷い。物の音も聞えないやうな灰色の中にあの人は住んでゐる——。胸の底からこみ上るやうな寂さが淚を誘ひさうになる。私は投げつけたい、苦しい胸をじつと抑へた。

女中が這入つて來た。

『お孃樣、お一人でお淋しゆうございませう。お湯が今丁度お宜しゆうございますよ。お浴衣はあちらの部屋へお置き致しました。』と取り散らされたあたりを片づけながら、慰め顏に云つた。

『さう——それではすぐにお湯へ這入るわね。』

『さうなさいましよ。さうしてご飯でも召し上つてからそこいらを少し步いてごらんなさいまし。仙臺はお始てでいらつしやいませう。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『えいさうよ――淋しい所なのね――。』

『それはあなた、東京の事をお考へになりましてはお話にも何にもなりませんけれど、かう見えても仲々いゝ所でございますよ。でも東京の足許へもよれませんからね。』

『さう――そんなに東京はよくつて――。』私と女中とはこんな會話を續けた。

女中が夕食を知らせてきたので、私は廣い部屋のドアをあけた。元祿格子の浴衣に、黑の渦卷の帶を締めた私は、二人の紳士の驚異の眼に迎へられた。あたりには浴衣や帶が脫ぎ散されてあつた。二人とも、顏を赤くつやつや光らして、ちやんと洋服に着變へてゐた。

『お休みになりましたか――。』かう云つて若い紳士は口を切つた。

『え――』私はどちらともつかないやうな返事をしてお膳の前へ座つた。

『面白い所なんて、ちつともありませんでしたよ。ね君。』と若い紳士は、私と中年の紳士の顏を見た。

『さうだつたね――。』と中年の紳士は氣のない返事をした。そして今買つて來た莓酒を私にすゝめた。

『もう一杯如何ですか――隨分甘いでせう。ごらんなさい。これは大變滋養分があるさう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ですよ。』中年の紳士は無理に强ひ乍ら、ついたゐた庭告を見せた。

『さうですか、私は不味いのをやつと我慢して呑んだのですからもう澤山です。』と私はそこへ置いた廣告を手にも取らなかつた。紳士は妙に顏を顰めて苦笑した。

『もう帝劇が開いてますね。だけど僕、どうも女優劇丈は見る氣がしませんね。あいつらの下手さ加減てひどいですからね。』と新聞を見てゐた若い紳士はかう云つた。

『さうですか――私はいつも面白いと思つて見ますね。そして隨分上手だと思つてますよ。女が女を演るのですものね。』私は自分で、言はないでもい〻、餘計な事を云つたので、厭な氣がした。

『さうですかね――實の所僕はたつた一遍しか帝劇へは行かないんですよ。』と若い紳士はしよげた顏をした。

『それより僕は浪花節がい〻な――。一つ聞かせようか。仲々うまいよ――。だがまア一度雲右衛門を聞いて見給へ、堪らないよ。實に立派な聲樂だからね――。』中年の紳士はかう云つて見まわした。若い紳士はにやりとして、苦笑して私の顏を眺めた。

『うん――聲樂ではないかな――。でも兎に角、立派な藝術家だからね。』と中年の紳士は周章て〻云ひ譯をするやうに云ひ足した。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『僕なんかもうあんな女だの、藝者だのを近づける氣はしないね――。』若い紳士はかう云つて、お膳を下げて行く奇麗な女中の後を見送つた。

『君なんかまだいゝんだよ。若いからね――。僕を見給へ、家へ歸るとこれでまた、大勢の小供に土産で責めつけられるんだからね。』かう云つた中年の紳士は、下へ垂れた鬚の端を濡して、赤くなつた顏をにや〳〵させ乍ら、苺酒をちび〳〵呑んでゐた。

『君はいゝな――。僕は去年家内を離縁したんだよ。二三年になつても小供が出來ないのでね――。』若い紳士は始は、ちらと不快さうに顏を曇らせたが、すが平氣な顏をしてこちらを見た。

『ふん――。』中年の紳士はかう云つた丈で別に何も云はなかつた。私はそんな事を平氣で口に出す人が心の隅につるのさへ堪らなかつた。私は自分の部屋へ歸るつもりで冷えたお茶を呑んだ。

『十時までにまだ三時間からあるのにかうしてゝもつまらないな――散歩でもするといゝんだけど――。あゝいゝ事がある。君、あそこに活動があつたつけな。ね君。』

『あゝさうだつたね、併し體が疲れるからね。散歩だけにしとかうぢやないか。』

『僕もさうだつていゝんだよ。大將どうです、せひご一緒に散歩なさいませんか。』と若い

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

紳士は呼び方に迷つて、幾度か口まで出かけて躊躇つたのを、今急に思ひ切つたやうに、急に親しさうな口調で呼びかけた。私はこの男がなぜ名を聞く事をしないのか不思議で堪らなかつた。

『え、參りませう。』若い紳士は私のさう云つたのを聞くとすぐに、『おい行かう。』と立ち上つた。

『そのスタイルではお寒かありませんか。』さう云つて若い紳士は私の浴衣を見た。

玄關には大勢の女中が並んでゐた。

『お旦那――せひ何か一つやらしておくんなさい。』汚れた鼠色の薄物を着て、角刈にした四十前後の、眼つきの賤しい、併しどこか意氣にも見える小柄の男が、かう云つて何か番頭に强請つてゐた。

『ちよつと待つてゝ下さい、電報を二三本書きますから。』中年の紳士はかう云つて帳場の方へ行つた。

『東西、先アづ第一番は立花屋の直侍をお聞きに入れまアす。』若い紳士は女中の傍へ腰を下して聲色使の妙な身振りにどつと笑ひ崩れた。私は、表門から玄關まで續いた敷石の上

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を、行つたり來たりして歩いてゐた。

停車場の薄暗い明の下には、草鞋を履いた老爺がしよんぼり立つてゐた。——ふと私は、玄關の雨側に据ゑつけてある大きな仁王樣を見いだしたので妙な氣がした。女中も紳士も夢中になつて、どよめき笑つた。たゞ、番頭はいつまでも、にやりとした顏を變へなかつた。

三人が門の側に客待ちしてゐた車屋に頻くすゝめられ乍ら出かけた時に、雨はぽつりぽつりと降つて來た。ホテルに續いて並んだ澤山の、軒の低い、昔風の宿屋は、北の國の古い町を思はせた。大通りへ出るまでの調つてゐない、たゞ廣い計りの道には、がた〳〵と小石が敷きつめてあつた。片側には、青い林檎を山のやうに積んだ夜店が並んでゐた。廣い道や、カンテラを點した薄暗い林檎店に、兄が書いてよこす、此の極の町によく似てゐた。素足に、今朝の泥道に、濡れて汚れた草履が冷かつた。

大通りへ這入つた。戶を半ば下した、薄暗い大きな店に、活氣のない顏が並んで、皆通りを見てゐる。氣持よく明るい。奇麗な本屋には學生が大勢這入つてゐた。

『可成賑かでせう。まア此の町が東京なら、丁度銀座なんですね。』と若い紳士が云つた。

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『君、茶代はいくら位置いてかうな――。』と中年の紳士は不意にかう呼びかけた。

『さうさな――帳場へ五十錢と、あの女中に三十錢もやれば澤山だよ。』若い紳士はすぐにさう答へた。

『だつてそれはあんまりのやうですね――。』私は急いでその言葉を遮るやうに云つた。

『なアに、それで澤山なのですよ。泊らないのですからね。』と若い紳士は、力強く云つた。

薄暗い町を、皆、傘を翳して歩いて來る。

『大分降つてきたな。どうもお氣の毒ですね、わざ〳〵誘ひ出して――あ、それに着物がだいなしですね。』若い紳士はかう云つて自分の肩のあたりを撫でまはした。

『なに、それ程ひどくはないからいゝさ。』中年の紳士は知らない顏でさう云つた。

『だつて君、さうはいかないよ。――今に車を目つけますから――。』と若い紳士の顏は心配らしく見えた。

『構ひませんよ。私は大丈夫ですから。』私は靜に答へた。向ふから銀杏返しの女が二人歩いてくる。二人の男の間の私を見ると、つと顏を見合した。

『ふゝん――。』こんな聲が通りすぎてから聞えて來た。雨は音を立てゝ降つて來た。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山のおもひで――三ケ島葭――

碎かんと恨みしかがみ火に溶けてさびしき影もうつすよしなし
さかしまに不安の中に求めたる命の如くはかなくぞある
明日をなす心の如く苦しかり昨日のままにあるを思へば
限なき幸さへえつと思へるを力無き身となりにけるかな
海底に死ぬるなりけりたのしみをみ空に忍がく我の心は
道知らず人を待てどもうつそ身のこと今何のかなしみも無し
かの頃の君が心とこのごろの我が心と似るも悲しや

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

みづからをいたはるこころたちまちに怠りとなる我の醜さ

あはれわが一つ一つにあらがひしそのみ心も今は忘れぬ

うき言葉われ一人のみ聞かんにはかばかり心痛めざらんを

海の香も花の香もなき秋の夜のにほはしかりし山の霧かな

○狂はんや君戀しさのまさる日はまづみづからの戀しきものを

或るものの影にてありし男かと驚きしこそおろかなりけれ

禍ひを避くることをばあらかじめさもしと知りし我にあらねど

○飽かれたる身かと思ひぬ二つ三つわがあやまちをとがめらるれば

○影のごと添はんとしたるさまをさへわがおろかさと怒りたまふか

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

君を見て飽かぬ瞳にむさましきわが衰へのうつる日となる

ここちよさここちあしさの後に知る我のよろこび我のかなしみ

おどろきて捨てはなたれしこの日までまもられにけん心なつかし

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

獵人——(つゞき)オリーブシュライネル

『そうだ、何のために私は此の恐しい瞬間で死んでしまう必要があろうか？　彼等は温かである。私のこの凍つた血を溶かして呉れた』

こう獨言して獵人は鬼火の方へ手を延しました。けれども其の瞬間に彼の目前に彼の眞にあこがるゝもの〻影像が現れました。で彼は一旦あげた手を落しました。すると鬼火は又彼を呼びました。

『オー、こちらへいらつしやい』

けれども彼は顔を掩ふて、

『お前はマボシー』

と叫びました。

『お前は私の心を温かにして呉れる。けれどもお前は私の慾望するものを與へはしない。私は死ぬ迄此處に待つて居る。行け！。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

彼は兩手でかたく顔を掩ふて彼等に耳を傾けずに居ました。暫くしてから彼が顔をあげた時には彼等はもとの二ツのキラ〳〵する星になつて飛んで行きました。そして遠ひ處で消へてしまいました。永い〳〵夜が過ぎて行きました。迷信の國を去つた人は誰でも此の暗い國を通らなければならないのだが或る人は二三日位ひで通り拔けます。又或る人は數ヶ月もかゝる、又數年かゝる人もある。其處で死んでしまう人もあります。

遂ひに幽かな光が地平線に沿ふて現れました。彼は其を慕ふて進みました。そして廣い日光の輝く處へ出ました。其處に彼の前に事實と實體(Dry-facts and Realities)の大きな山が聳へて居ます。太陽の光が晴やかに其の山を輝らして居ますが其の頂上は雲にかくれて居ました。麓には幾筋かの道が見へましたので彼は狂喜しました。彼は眞直ぐに見ゆる道を選んで登り始めました。彼の喜びの歌は岩にも山脊にも響き渡りました。彼は今愉快です。彼はこう思ひました。

『今迄に聞いて居た話しはつまり大き過ぎて居たのだ。山は聞いた程高くはない、道も話し程險しくはない。二三日か二三週間或はどんなに手間取れても二三ヶ月もかゝれば頂上だ。そしてたつた一本計りの羽毛でなく他人の見出した羽毛をも皆私の手に集めやう。そして早速網を造つて眞理を捕へやう。此の手で彼女に觸れる。確り彼女をおさへる。彼女

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

を抱へ！』

彼は暖かな日光を浴びながら笑ひました。聲高く歌ひました。勝利は近づいたと思つて居ます。が暫くすると道はだん／＼險しくなつて來ました。息が切れて來ました。歌は何時の間にか出なくなりました。右にも左にも少しの苔もついて居ない巨大な岩が嚇すやうに立つて居ます。下には燒石のやうな地面に大きな裂罅が人を呑まうとして居ます。此處其處には白骨が光つて居ます。道はだん／＼細くなつてしまいには小道となり、唯かすかな人の足跡となり、遂には消へてしまいました。彼は自ら一方へ道を定めて一生懸命歩き出しました。遂に彼は大きな岩の壁につき當りました。それは目のとゞく限り全體滑かで一ツのトギレもありません。

『私は梯子を造つて此の壁へかけてやろう。此を登りさへすればもう殆んど目差す處へ行くに違ひない。』

と彼は勇氣をふるつて申しました。彼は想像の梭で石を堀りました。けれども彼が堀つた石の半分はやくにたゝないだろう。彼の土臺石の選みやうは惡いから彼の半月の仕事も恐らくは崩れるだろう。けれども彼は始終獨言しながら働きを續けました。

『此の壁を登りさへすれば殆んど其處へ達するのだ。此の大きな仕事が終るのである。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

と。遂に彼は壁の頂上に出ました。そして周圍を眺めました。遙か下には白い霧が彼の捨てた迷信の國にかゝつて居ます。上には又々高い山が巍々として立つて居ます。前に見た時にはさのみとは思はなかつたが今見れば其の高さは計り知られません。それればかりでなく其の山は麓から頂上迄岩の壁に取り巻かれて居ます。其の壁は幾層も〳〵段々になつて頂上迄行つて居ます。彼は絶望の聲を發しました。彼は地に顔を伏せました。彼が起きあがつた時には彼の顔は青白くなつて居ました。彼は無言で歩き出した。彼は全く沈默しました。此の高い山の稀薄な空氣は山間で生れた彼のためには呼吸が困難であります。一息毎に彼は云ひ知れぬ切なさを感じます。指先きからは血がにじみ出て居ます。が彼は次の壁に對して階段を刻み始めました。高さは無限のやうに見へます。けれども彼は何にも云はない。鐵のやうに堅い岩をたゝく音は夜に日をついで聞へました。こうする事が何年か續きました。彼は止めません。山は依然として天迄とゞいて居るやうに思へます。そして其は全く裸岩で草の葉一本ありません。で彼は時々心の内で、せめて苔でも生へて居て呉れたら自分の友にする事が出來ると思ひました。又何年かゞ過ぎました。彼は彼が刻んだ階段の數で年を數へます。それはやうやく一年に二段か三段でした。彼は今歇どころではありません。こうしやうともあゝしやうとも云はなくなりました。彼は唯働いて居ます。

その頃の事でした。日が全く暮れると岩の穴や、割目から不思議な野獸の顏が幾つか覗いて、

『お前の仕事は止めて我々と一所に話さないか、淋しい人よ。』

と云ひました。

『仕事が私の救ひである。もし私が一分間でも止めて居たならお前等はすぐ私のそばへ這つて來るだろう。』

と彼が答へますと彼等は長い首を差し出して、

『お前の足許の其の割目の中を見よ。何にが其處にあるね、それは白骨だよ。お前のやうな大膽な強い人が以前に此處迄登つて來てそして此の山を見上げた時に其の人は此の如き努力するの無駄な事を悟つた。其の人はもう眞理を探す事も、見る事も亦捕へる事も望まなくなつたのだ。其の人はあんまりくたびれて居たので此處へ横つてしまつた。そして睡氣に自分を與へてしまつた。彼は永遠に睡むつてしまつた。睡りは靜かなものである。淋しくないものだ。手の痛みも忘れるし、人の苦しみもなくなる。』

獵人はせゝら笑ひをしました。

『お前等のやうな怪物の餌食になるために最も大切なものを自分の心から捨てられるもの

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

か。何のためにたつた一人で夜の國を通り誘惑に打ち勝つて來たと思ふか。何のために人間の聲のない處へ迄來て一人で働いて居ると思ふか。こんな處へ横はつてお前等に食はれるためではない！。』

と云つて彼は荒々しく笑ひました。すると今迄首を出して居た怪物、絶望の反響（The Echoes of Despair）はコソ〳〵と引きこみました。膽力のある強い人の笑ひ聲は彼等には大打撃です。が彼等は又醜い顏を出しました。

『お前はお前の頭が白くなつた事や、手が意氣地がなくなつて震へて居る事を知らないのか。それからお前の其の梭は先きが削れてしまつて、ヒヾが入つて居るではないか。もしもお前が其の階段を一ッ登つたとしても其れがもうお前にはおしまいだ。とてももう一ッ登る力はありやしない。』

『そりや私も知つて居る。』

と云ひながら彼はやつぱり仕事を續けて居ました。老ひた痩せた彼の手は石を不器用にギザ〳〵に切りました。指は强ばつて曲がつて居ます。人間の美及び力は既でに彼を去りました。

遂ひに小さく凋びた彼の顏は岩の上を眺めました。永遠の山は白い雲の上迄聳へて居ま

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

す。けれども彼の仕事は終りました。彼は草臥て右手を組み合せました。そして其の生涯を働き盡くした崖のそばへ座りました。それは彼のためには睡むる時になつたのです。下の彼の生れた村には濃い白い霧がかゝつてゐましたが其の一部分が切れて、其の切間から今死なんとする彼の目は彼の子供の時に遊んだ野菜や樹木やを見ました。彼の耳には遠い方から、彼が一度捕へた鳥の鳴き聲や、人々が歌つたり踊つたりして居る騷が聞へました。そして其の騷の中に彼は村人等の聲も聞きました。日のあたつた彼の昔の家も遠くに見へました。彼が目には涙が沸いて來ました。

『あゝ、彼處で死ぬ人は一人ぎりで死ぬのではない!。』

と叫びました。

やがて霧の切間は又一所になつて村を覆ふてしまいました。彼は目をそらせました。

『私は永い間求めて居た。働いて來た。けれどもとう〳〵彼女を探し當てなかつた。私は休まなかつた。愚痴も云はなかつた。それでゐて彼女を見ないうち私の力は盡きてしまつた。私が疲れて倒れた處へ外の若い元氣のいゝ人が立つだろう。私の足跡をたよりに外の人々が進んで來るだろう。彼等は私が刻んだ階段を登つて來るだろう。彼等は此の階段を刻んだ人の名を決して知らないだろう。彼等は此の階段の不器用な出來榮へを笑ふだろう。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

もし一ッでも階段が崩れたなら彼等は此を刻んだ私を呪ふだろう。けれども彼等は私のして來た仕事のために進んで來る事が出來る。私の刻んだ階段があるために登つて來られる。彼等が彼の女を見出すだろう。そして其れは私を通してゝある。誰でも自分計りのために生きるのではない。自分計りのために死ぬのではない。』

と云つた彼の皺だらけな眼瞼から涙が流れ出ました。死の霧が今彼の目に集まつて來ました。もしも此の時眞理が彼の直ぐ上の雲の中に現れたとしても彼にはもう見へなかつたでせう。

『私の魂は、喜んで進んで來る人々の足音を聞く彼等は登らねばならぬ。彼等は登らねばならぬ。』

彼は痩せた手を目に迄持つて行きました。此の時、靜かな白い空中から何にかゞだんだん降下りて來ました。徐かに其はヒラ〳〵して今死にかゝつて居る獵人の胸の上へ落ちました。彼は其を觸つて見ました。其は一本の白い羽毛でした。彼は其れを握つて死にました。

（をはり）

山田わか譯

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

御宿より――らいてう

野枝さん、

何か書いて御送りしたいと思つて今手籠の底から原稿紙をもち出して濱に出て來た處です。そして大きな砂丘のかたかげに風をよけ、腹ばひになつて、向ふの半島の柔かい山肌を眺めながら何を書かうかと考へてゐる處です、私の背中は太陽の直射の下に熱してゐます。私の腹部は燒け砂で快いぬくみを感じて居ます。私は此處へ來てから出來る丈、戸外の生活をして居ます。外氣の中に放たれて日光に親しんで居ます。まだ五日ばかりですが私の皮膚はもう大分黒くなりました。それもその筈です、かうして殆ど終日濱にゐて、海や山や雲を見ながら日なたぼつこをしてゐるのですもの。

此處の濱は思つたよりも實にいゝ濱でした。第一濱が廣くて長い。そして砂が白いその上大きな砂丘が波線をなして砂丘から砂丘に續く。そこには「濱菊」とでも呼びたいやうな菊に似た金色の花が日に向つて咲いてゐる。眠さうな顔付の牛が一日そこで青草をはんでゐる。

一體御宿といふ所は山脈が大圓を描いて東北西をふさぎ、只南に向つて口を開いて大平洋の水を呑まうとしてゐるやうな地勢

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

です。又かうも云はれませう北方一帶に連る山脈が長い兩腕を南に伸して海を抱き込もうとしてゐるとも。その左の手の先に當る島山岬は丁度駱駝のねてゐるやうな形をしてのばした首を海中に高く突き出してゐます。

　私はその岬の方に向つて渚づたひに歩いて行くのが毎朝のならはしのやうにいつかなりました。そして不思議にその時に限つて、（一體私にはさういふことはめつたにないのですが）出來るつ丈の聲を張り上げて何か歌つて見たくなるのです。それで私は久しぶりでうろ覺えの色々なものを大聲にうたつて見ます。それはもう唱歌だの、詩吟だの、御經だの、謠だの出放題なのです。こんな時には自分のやうなこわつばしい咽喉からも思つたよりは自由に或メロデイが流れ出てくるのが却て案外な感じもして何だかいゝ氣持になります。行手――岩和田の方にあたる丘からは海女連が燃く海草の青白い煙が幾箇所からも勢よく立ち昇つて、半島の腹を、斷崖の胸を横ざまに霞めて、岸に碎ける白波の上を滑りながら海の方へと長く〳〵なびいて消えて行きます。波打ち際の處で屹度二羽づゝ遊んでゐる小さな海島は一波去つて、また第二の波の寄せて來ない滑かにぬれ輝いた砂の上を細い〳〵そして比較的長い脚を見えない程小早く運ばせなから並んで歩いて行きます。そのちよこまかした姿は何とも知れず可愛ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しいものです。何といふ鳥なのでせう、あなたは御存じですか、ちどり位の大きさですけれど、もつととぼけた形をしてゐます。何といつたものでせう、まあ鴫のおもちやとでもいつたら感じが出さうです。眞白な腹から突つさしたやうに長い二本の脚が出てゐるところなんか。そのくせ眼丈は鋭くきれてゐるやうに見えるのです。少し近寄ると、すぐ飛んで仕舞ひます、そしてかなたの砂の上にやがて下りてそして又例の氣せはしさうな歩みを始めます。飛び去つたあとの砂の上には小さな〳〵足跡がいくつともなく奇麗に並んで殘つて居ます。それがまたたまらなく可愛らしい感じのするものです。

先刻から眞裸な濱の子が二三人私のまはりに突つ立つて、不思議さうに私の書いてゐるのをしばらく見守つて居ましたが、無言で、いつかいつて仕舞ひました。その後から白い蝶々が二つもつれながら飛んで來ました。そして今、私のペンの先で戲れて居ます。私はペンをぢつと靜止したまゝで白い砂の上に落ちた小さな二つの影に思はず見とれて居ます。波の音は靜かに、そしてリズミカルに寄せては退き寄せては退きして居ます。どうしてこの地球上に今大戰爭が起りつゝあるといふやうなことが信じられませう。號外の呼聲もあの鈴の音も私にはもうあんまり遠ひことのやうに思はれますもの。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何だか頭がぼーつとして眠たくなつて來ました。からだ中が——頭の先から足の先までしんからほてつて來た故でせう。それに強い日光の中でものを書くことに慣らされてゐない私の眼はすぐに疲れてくるからでせう。しばらく休みます。

野枝さん、

かうして半裸體になつて秋の太陽の光の中に浸つてゐることはほんとうに愉快なことです。私は人間が着物を纏つてゐるといふことがいかにも不自然なやうでいやになつて來ました。そして先頃小倉さんの發言で私逹が集まるとよく話しあつたあの裸體倶樂部のことを思ひ起しました、そしてあの計畫が何とかいゝ方法のもとに實行されたらなどとも思ひました。

見渡したところ今この廣い濱には遠くに人影らしい二つ三つの點が見えるばかり、一頻り騷いてゐた數羽の鳥の群もその鳥を追つては却て鳥にからかはれてゐた犬の影もいつの間にか見えなくなりました。只一樣にキラ〳〵と強い光を白く反射する砂の面に大きな雲が紫の影を落しながら砂山から砂原かけて靜かに過ぎて行きます。海の面の何處からも見えない大きな砂山の間に佇んでゐると何だか砂漠にでもひとり置き去りにされたやうな或るさびしさが身に迫つて來ます。もしあの藁屋根の頂が見えないなら、そしてあの波の音が、又どうかす

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

るときこゆる牛の聲がしなかつたら……

何といつても一日中で一番濱の賑ふのは朝の中のことです、それはこの邊からずつと九十九里の濱にかけて名高いものの一つになつてゐるあの地曳がかけられる時刻だからです。今、私は地曳のことを少し申しませう。

朝起きてすぐ濱に出て見ると、幟が二ケ處に立つて居ます。綠の山を背景にして細長い眞赤な布は、より眞赤にその鮮かさをきわだてながら北風をうけて海の方になびいて立つて居ます。ラッパの音をきいて四方から此處に集つて來た近所の百姓達は二ケに分れて長い列をつくりながら太い綱を曳いて居ます。見たところ百人ばかりもありませうか、その多くは女ですが、皆手拭かふりで、堅くしまつた筒袖の、膝切りの仕事着をきてゐますから、年寄も若い娘も一寸區別がつきません。いえ着物の故ばかりではないのです。この邊ではまだひとりとして若々しい柔かさと艶とを保存してゐる娘らしい娘を見受けたことがありません。どれもこれも皆身體はいかにも頑丈に出來て、よく發育してゐるのに、何處か虐げられた人のやうな黄黒い、固いひからびたやうな顏付をしてゐるのはどうしたものでせう、私がまだ彼等の中から特殊な美を見出すことが出來ないからでせうか、美に對する都會の因習的な眼に罪があるのでせうか。それとも過勞と粗食の結果彼等は生

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

來の美を早く失つたのでせうか。何故ならば此處では男よりも女の方が遙かに多くの勞働を課せられてゐるやうですから。重さうな荷車まで女によつて曳かれてゐるのを私は見ました。まるで島國の風習のやうに。

　是等の女達の眼は私の姿を一目見ると一際に私の方に注がれます。終には勞働に何の餘裕なくこの汽車の便利な今日をまだ一度も東京の土を踏んだことのない彼等には私といふものが異國人よりももつと物珍らしくも奇怪にも思はれるのでせう。初めて私を見た時のその最初の幾分かの彼等の凝視は、私が彼等にとつて「見物」である以上に私にとつてよい「見物」でした。（私は帽子をかぶつて寢卷の上にマントを着て居ました。）殆ど子供によく見るやうに呆氣にとられて見入つたまゝ、しばらくはものをいふことさへ忘れ果てたやうに顏の筋一つ動かさずにだまつて居ましたが、次の瞬間には仲間の顏と私の顏とをかはる〳〵見ながら妙な微笑を浮べました。そして最後に何か話し出しました。

「こいた、こいた、こいた」と是等の人達を指揮監督してゐるらしい年長の男に促されて彼等は初めて我に返つたらしくいつか御留守になつてゐた腰に再び力を入れて曳き始めました。次の日には彼等は互につゝきあつたり何かして私がまた來たといふことを知らせてゐるらしいやうでしたか、今度は支那人だとか、朝鮮人だとか、異人だ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

とか口々にいつて何かわからぬ惡口らしいことを大聲に言つてゐるやうでした。その時彼等の顔には前の日と同じやうな微笑が上りました。私はそれで始めてその微笑が彼等の外國人に對する或る輕侮と反感と恐怖と好奇の念の表れたといふことを知りました。その翌々日でしたか私は海岸からもう歸らうと思つて砂山を下りてくるとその下で網を乾してゐたお婆さんから「あんた、お前さんの國は」とたづねられましたで、私は東京から來たと答へますと、東京の人を朝鮮人だの異人だのつていふやうな奴はぶちかへしてやるがいゝといふやうなことを言つて獨り大きな聲を出して笑つて居ました。

そのお婆さんから濱の人達に傳はつたのかどうか知りませんけれど、もうこの頃ではさう惡口なんか云はないやうになりました。まだ相變らず珍らしさうに見ることは見ますけれど。

話が横道にはいりますが原田さんも矢張り支那の革命黨の人と思ひ込れたのださうです。そして原田と變名して御宿の土地にはいり込んで來たといふので一時その筋から注意されたさうです。東京のお家へしらべがきたのも全くこんな滑稽な事からなのださうです。これはこゝの製氷會社の理事をしてゐられる某氏から伺つたのですが。まだ原田さんについての村の百姓達の奇拔な觀察もきゝましたが、それは後日にいた

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しませう。

網はだん〲と曳き寄せられてとうと沖にかけてあつた網が水の外に現れて來ます。細い網の目からは小さな魚が頭丈出していくつともなしにひつかゝつて、まるで銀色の玉で飾られたやうになつてゐます。女達はてんでに大きな籠をもつてそこに駈けつけて、我れがちにそれをもぎとるやうにしては自分達の籠の中に入れて仕舞ひます。いよ〱網がすつかり砂の上に上げられると澤山の魚が中でピチ〱と躍つて居ります。網をあげると、大きな藻の中から鏡のやうに光る魚がいくつも〱はね出て來ます。大漁と見てとると人達は俄に興奮してけしき立つて來ます。見るまに魚と藻とは分けられて、砂の上に並べられた數十の大きな籠の中は魚で滿されて仕舞ひます。

カマスや、アジやイワシなどが龍宮の美しさを想像させるやうに青や、綠や、紫や金や銀に光つて居ます。

籠からこぼれた魚は砂まみれになつてはねてゐると、子供達がそつと拾つてさもうれしさうに握りしめながら家へもつて歸ります。

漁師の話によると、今は丁度鰹が終漁期となつた處で、ここしばらくはあいの間で仕事もないのださうです。けれどもう半月もしてイワシやサンマの漁期にはいると濱はまるで戰場のやうに非常に賑はうのださ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

うです。さうしたらまた何か御知らせいたしませう。

この間、いゝ御天氣の日、勝浦から例のガタ馬車へ乘つたり、歩いたりして、房總の國境のおせんころがしの斷崖を見、日蓮上人の誕生地として知られた小湊を過ぎ、とうと房州の海岸づたひに波太峠まで行つて一泊いたしました時のことも書きたいと思つて居りましたがそれも後便にいたします。十一月の編輯がすんだら一度遊びに來ませんか。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

達摩さま ― 皐月

この小さなお双紙を上田さんにお目に懸けます

しほ子は机の上のたゞならぬ物音に驚いて赤地友禪の肩當の上に柔い黑天鵞絨の襟をはね退けて頭を擡げました。そして枕許を斜に置かれた机の上を氣づかはしさうに覗き込むとはつとして飛び起きました。音は厚い重い鏡が辷つて倒れたからなのでしたが、無慘に情けない破壞が其銀色の透明の下にのぞいて居るのでした。しほ子は一目見ると大變な恐ろしい事が持上つた樣に胸をどき／＼させ乍ら急いで鏡を取退けましたが、急に胸の奥がくわつと熱くなつた樣に思ひました。そしてほうつと長い息を吐き乍ら、さも觸はる事が恐ろしいと云つた樣に、さはつたら其物が怎うかなりさうだと云つた樣に指も動かさず眤と、横樣にぴつしやんこに潰れた哀れな姿の紙人形を見つめて、只もう極りの付かないうちに事が濟んで了つた時や、取返しの付かない事に出合はした時などに誰でもが感じる樣な滅入つた氣になつて居ました。四寸許りの派出なお振袖のお姫樣は何にも御存じない樣に慘ましい死骸をしほ子の前に曝らして居るのでした。暖かさうな膨らみの何處にも失な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つていやにぎごちなく突張つて了つた姿を見て居るうちにしほ子は段々悲しい口惜しい氣になつて來ました。

『此廢物を置いた許りに………。』

　恨めしさうに鏡を取上げては見ましたが、更に潰されたあね樣の姿を見ると急に情けなくなつて、長い睫を一雫がぽたりと膝の橘の模樣の上に落ちました。

　しほ子はまだ氣分のいゝ頃、此麽あね樣を幾人も拵へたのでした。初めのうちは演藝畫報の繪の樣にきれいな寫眞や、昔の草双紙などから形を採つて色々工風して居ましたが、其内に段々巧者になつて讀んだもののうちから繪になりさうな處々を引拔いてはあれこれと千代紙の撰擇に苦しむのでした。追々大きなグループなどを拵へる樣になつたしほ子の喜びははたの人達に迄も及ぼさなければ氣が濟まないのでした。髮の張り工合や、首のかしげ工合などの工風一つで、懍とした政岡や物柔かな冲の枝や悄さげな八汐などのおかいどり姿を立たしたり座らしたりして、絹糸でかゝつた雀の籠や千代紙一つで拵へた脇息や腰の物まで取そろへて小さく可愛い鶴千代君の前に供へて、腰元をずらりと並べた華かな女護島の竹の間を拵らへた時などは、幾夜も幾夜も夜を更かして一人々々出來て行く思ひ〳〵の姿にどれ丈け喜ぶのでしたか、しほ子はこの氣持は人には分りやしないと思ひ乍らもう

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

嬉しくて嬉しくて堪らないのでした。そして來る人毎に見て貰ふのでした。器用だとか感心だとか驚嘆の聲を聞くのも小供らしいしほ子には嬉しい一つなのでした。

此麼偉きな滿足をしほ子に齎す丈けしほ子は又澤山の精力を千代紙に吸はれるのでした。其間は御飯頂く事も寢る事も忘れて居るのでした。どうかすると製作の半ばで頭がぼうとして目の前の物が皆後へ退いて行く樣な事が時々ありました。何を見ても何を聞いても物を挾んで意識する樣な朦朧とした知覺外働かない程、睡眠不足が頭を痺らす事がありました。それでもしほ子は止められないのでした。そうして華かな千代紙を纏(まと)つた艶めかしいあね樣を幾つも幾つも澤山並べて、江戸室町の優暢な空氣の中に自分を浸らしては夢の樣な日を送つて居ました。

其れ等の澤山のあね樣の中でしほ子はこの初菊と十次郎の一對が一番好きでした。そして一番手際に出來て居たと思ふのでした。

しほ子は茄子色地に橘のメリンスの寢卷の膝にぴつしやんこになつた初菊を立たして見ました。天具帖で膨つくら張らした兩鬢は顏のありかも分らない程にひしやげて了つて、摘みの前簪が潰れた前髮の上へぶら下つた首は一目見ても吹き出したい迄に滑稽におどけた慘ましさに替つて居ました。赤地に藤紫と淡淺黃で友禪樣の紫陽花を染め出した振袖の

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

片振りを片手に摘み上げて、そつけなく反對向いてる十次郎の横顔を肩絹越しに恨めしさうに見遣り乍ら、體をくねらした儘鎧櫃の前に立つて居たいぢらしい姿が此麼に迄變り果てたかと思ふと、しほ子は怎うせ駄目とは知りつゝそれでも未練らしくピンの尖で鬢を膨らましたり前髪を直したりして机の上に置いて見ましたが、ふはりと持つて居た振袖が平らべつたく胴にくつ着いて、腕の心にして置いた針金が袖を破つて突き出した邊が一面にお白粉が散つて居りました。こよりで拵へた手に塗つたお白粉が粉々に散つて了つたのでした。しほ子は沈んだ顔をしてくるりと後を向け替へると、捩ぢれた輪斧や、枕の飛んだ猫ぢやらしなどがみすぼらしい姿で現れました。

『いくら拵へ直したつてもう此麼のは出來やしない………。』

しほ子は泪ぐんで獨ぽつちになつて了つた光義の幾枚も幾枚も重ねた眞白な襟元をいつ迄も視詰めて居るのでした。

此頃になつてしほ子の體がめつきり弱つて參りました。自分でも一滴々々と自分の體から血が退いて行くのだと思ふ程蒼くなりました。夜が來ると晝を思ひ、晝になると夜を思ふ樣なぶら／＼し乍ら氣許り揉む事さへ此頃ではなくなりました。只懶い自分の體を別な

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

何かゝ彼方へ此方へ運んで呉れる儘に方々で横になつたり寄り懸つたりくづ〳〵日を送るのでした。其うちにいつか夜が來ます。と又一日中無爲に經つて了つた不快を引づり乍ら床の中で不明瞭な時を潰すのでした。

　しほ子は肉の底を澤山の蟲が髭か何かで突き乍らうよ〳〵匍つて居る樣な氣持の惡い左の胸を上向けて夢と現の間をうつら〳〵して居る間に、其不快な感じが夢になつたり、現になつたりしてしほ子を苦しめるのでした。そしてしほ子は知らない間に其處を撫でたりさすつたりし乍ら息のつまる樣な苦しい睡りの中に落ちて行くのでした。此麽にして漸々はつきり目の醒めるのはいつもお日樣の高く上がつた頃なのです。それからも長い事起き樣起き樣と思ふ心と、何も彼も面倒な不活潑とがもや〳〵ともつれ合つた後でないと中々床が離れられないのでした。此麽にしてもしほ子は强ひて床を離れるのでした。病人らしい自分の姿を成可く見まひとする自分がしほ子には氣の毒にも思はれたりし乍らも矢張りそんなにして生きて行かねばならないのでした。

　しほ子は脇明から手を差込んで、例の嫌な氣持のするあたりを押し乍ら日光の一杯に映し込んで居る椽に長々と横になつて、白い足袋をしつかり裾にくるみ乍ら漸々咲き出した草花のまぶしい迄光つてる花瓣を眺めて居ますと、匂ひあらせいとうの甘い匂ひが時々し

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ほ子の顔のあたりを色のない煙の樣にふはりとよ過つて參ります。蕾を破つて思ひ〳〵に、與へられたどんな小さな箇所でも少しのあやまりなく咲き出したこれ等の花が、まだ小さな〳〵種子の中に長い未來を樂しんで居た頃はしほ子も生き〳〵と氣持のいゝ娘でした。そして何時もむつちり肥えた手で華かな娘氣を繪の具皿に溶いては繪筆を振つて餘念のない娘でした。

しほ子は左の胸の底から段々蝕れる樣に思ふ每に、

『この虫に食べ盡されない前に何か大きなものが書きたい。一度も文展に出さないではどうも死にたくない……。』

此麼事を思つては無暗にあせつてては見るのですが、繪絹は枠に張つた儘一點も染めてはありませんでした。

しほ子は源氏が好きでした。朧月夜の廻廊を白い繪絹の上に浮き出させたり、出來上つた畵面を頭の中で見入つたりして居るのですがそんな幻影は直がらりと崩れて、腦味噌の髓まで灰色に鈍るのでした。そしていつか其前にくづ折れて繪とはまるで飛び離れた別な事を考へて居たりする自分を見付け出したりして、

『又氣分のいゝ日だつて其中にはあるは。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

斯う云ひわけをしては思ひ切り惡く其處を離れたりするのでした。時には
『書きたくて書きたくて仕方がないのに何故書きたくないのだらう。』
などゝ泪ぐんで居たりしました。
しほ子は心の何處か奥の方に氣の濟まない塊が渦卷いて居る樣ですがそれが何だか分らないのでした。そして其又分らないと云ふのが氣になつてなりませんでした。
『何にもありやしないんだは。』
强ひてその不安を壓さへてしほ子は庭に下りました。そして花壇のあちこちを步き乍ら枯草を拐つたり、凋びた花を採つたり、二三日前に裏の芝生から見付け出して植え替へた匂菫の幹に水をやつたり暫らくぶら〳〵して居りましたが、矢張り分らない何やらが意地惡く何かある、何かあると云ひ乍ら神經の尖をつつ突くので、しほ子は自分の心が一寸も自分を支配して呉れない樣な五體の離散を感じるのでした。
しほ子は新綠を吹い居る辛夷の幹に背を凭せて目を閉ぢ乍ら、心臟の奥の奥で囁いて居る聲を聞くさよりは覗樣と樣に頭の中で大きく目を瞑りました。
『あゝ、あね樣を拵らへ樣と思つたのだつけ。』
しほ子は氣持のいゝ微笑を洩らしました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

けれども重い氣分は中々其處へしほ子を導かないのでしたが、漸々の思で天具帖を鬢は鬢、髱は髱で筆の軸に卷いては皺を寄せ始めました。

『揃らへるの。』

茶の間に仕事をして居た母が氣遣しさうに聲を懸けるのでした。此麼お細工で根氣を疲らしたら又弱るだらうに、そして―馴れた時程の手際が出ないでは噍ちれるだらうと母親ははら〳〵し乍ら

『揃らへ直さなけりや氣が濟まないのかねえ。』

『屹度あんなには出來ませんよ。ほんとに口惜しい事をしたは。彼麼處に鏡など置かなければよかつたのに。』

しほ子の絶望的な滅入つて聲を聞くと母親は

『お母さんが出來れば揃らへて上げるけれどね。貴方は何をしてもこるからいけませんよ。まあぢや緩りなさいよ、こらずに。』

しほ子も何だか出來さうがないと思ふのでした。それでも抛つて置けば毎日いやな思ひをしなければならないのが嫌やさに、嫌や〳〵前髪と髱とをつけて少し頭らしくなりました。顏の兩方に羽根を廣げてる鬢の紙をしほ子は注意深く根に結び付けて見ましたが、前

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

がゆるんで思ふ樣にならないのでした。暫く眺めた上句根元にパチンと鋏を入れると背中がさつ熱くなりました。幾度も遣り直すうちに紙は揉める許りで思ふ樣な形が出來上らないもどかしさに只おどおどと落付かなく指先が震へるので、しほ子は體中が火照つて來ました。とう〳〵お乳の下あたりがびく〳〵泣きさうになつたので蜻蛉の羽根を廣げた首を拋ると眞赤な顏をして庭へ出て了ひました。そして情けない氣を疊み込んだ胸に手を組み乍ら、家の中からは見えない裏の芝生の方へ廻りました。其處には去年の古い芝が汚らしく處々殘つた中に青々と新芽がのびて居ました。去年の春一杯に植え込んだ菫の黑い迄濃い紫がまだしほらしく其處に殘つて居ました。春の强烈な日光がしほ子の背中に燒き付いで、振り仰ぐ青空さへしほ子の衰へた目に痛い感じを與へる晩春の眞晝でした。しほ子は菫の一塊り咲き亂れた柔い芝の上に蹰踏んで、遠く斜に見える手洗鉢の横の霧島に目を遣りました。血の樣な花が全體に日光を浴びて此處からは只一團の焰の樣に見えるのでした。しほ子は赤い塊りを只夢の樣に視詰めて居ました。知覺神經の凡てが兩眼からすうつと拔け出して體丈けが殘つた樣な無意識狀態で、眼の前を幾つもの金の輪の動く迄知らず知らず眼の奥に力を入れ乍ら瞋つて居るうちに、くら〳〵眩ひがして蹰踏んだ足許がぐたりと其處へ座つて了ひました。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しほ子は此頃下半身の力が全く上半身の重みを支へ切れない樣に、いつも細い腕を突かい棒に疊に突いて居るか、でなければ柱でも襖でも茶棚でもおかまひなしに寄り懸るのが常でした。

しほ子は其儘ずるずると體を芝生の上に伸ばして了ひました。そして靜かに眼を閉ぢて、鼠地の半襟のしのぶの縫ひが一寸覗いてる合せ目の襟許で、兩手の拇指をあじろに組んで掌と掌を抱き合せて居ました。しほ子は體中の熱が手の平の眞中に集つた樣な不快を壓し潰さうとするのでした。心持のいゝ風がしほ子の顏を柔かく撫でるとあたりに松の花の匂ひが殘りました。しほ子は斯うして春が過ぎてまた夏が來る。そして夏が過ぎて秋が來ると思ふと急に過去に對する懷かしみと時の過ぎる味氣なさとがしみじみと胸に湧くのでした。そして、此麼心持が絶える時は死ぬ時なのだ。死ぬ迄此麼心持を引づつて外行けない樣に生れ付いて居るのだ何が出來樣……

伏した芝がむくむくと頭を擡げた樣な氣味惡い感じが足袋と裾の間から滅入つたしほ子の神經を一處に集めました。しほ子は足の先から頭迄むづむづ氣味の惡い感じが廣がつて行くのを感じながら固くなつて居ました。

しほ子の蟲に對する憎惡は並大抵のものではありませんでした。秋の花に狂ひ寄る蝶を

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

見てさへ毛虫の醜態を考へずには居られないのでした。夏の夕方羽根のきかなくなつた羽虫が燈火の廻りにうよ〳〵集つたのを見てさへざうつと寒くなるので、避暑に行く時の一番それが心配なのでした。

しほ子は色んな形の幾千の蟲がむづ〳〵と幭巾を匍ひ廻つて居る樣な厭はしさに總身の毛穴を緊縮させ乍ら、固くなつて一寸も動けないのでした。若し少しでも動いたら異形の小さい動物が一緒に跳ね廻りさうなので態と體を重く芝の上に置いて居ました。

しほ子の閉ぢた目の中に光線が色々な色で渦巻き出しました。赤や黄や紫や綠が目頭から目尻へ表はれたり消えたり煩さくちら付いてるうちにいつか甚麼色が一團に塊つて目の中が夜の樣に暗くなりました。何處か高い處で木の葉のさつと云ふ音が聞えました。しほ子の頭の中には四日の月が傾いて居ました。

鵠沼の電車を下りると傾きかけた四日の月はしほ子逹の行く路を照すには頼りないものでした。只兩側が深い松並木の樣に見えました。その並木の處々か低くなつて居る邊を電線が懸つて居るのが見えたりしました。その邊を舟の樣な月が輪廓をはつきり見せて居るのでした。しほ子は並木の中に埋まつたこの細い道が何處までも續いて居さうなのを透かして見乍ら一寸心細くなつて、

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『何處へ行くのでせう。』

と半ば自分に云つて居る樣に云ひました。そして『心細い事』と付け足してモンチメタルな場面の中にしみ〳〵した心持で浸つて居たい樣な氣でしたが口へは出さないで了ひました。

『海岸へ出る筈なんですがねえ。』

『…………』

『波の音が聞えるでせう？　正面から。』

しほ子は靜平と耳を澄ましました。

すく〳〵としほ子の一足々々に押よせて來る暗の中でしほ子は暗を切り乍らとぼ〳〵と歩いて居ました。さうして居るうちにこれ切り離れて了はなければならない人と道も分らない處をさ迷つて居るといふ事が切ない迄寂しくなつて來ましたので、

『あ――』

細い呻きを砂に呟きました。

丁度其時道が十文字に交叉して其一方から豆の樣な提燈が見えて居ました。そして今來た道の行手は如何やら行留まりらしくも急な阪の樣にも思はれるのでした。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『此方へ行つて見ませう。』

男は提燈の燈の方へ曲りました。暫くしてしほ子は

『此處には東屋と云ふのがありましたでせう。』

と云ふと

『僕ね、今日ほんとに泊らないで歸りますからね。』

突差にしほ子は腹立たしさと戀しさとが込みあげて男の顏を振仰ぎましたが只黑い暗がもや〳〵と動いた丈けでした。

しほ子のひ弱な體は强烈な戀を樂しむ樣には出來て居ないのでした。忘我の境を夢の樣にさ迷ふ一瞬間を持ち得ない程血の沈んだしほ子は寂しさと苦しさと儚さと、煩らはしい執着とより戀から味ふ事が出來ないのでした。そして自分の頰が蒼くなればなる程此麼答から逃れたいと思ふ樣になりました。しほ子は知らず〳〵のうちに强い刺戟には一刻も堪え得ない程病に疲れて了つて居ました。

しほ子は生涯のうちでたつた一度の戀が終はると云ふ今夜丈けせめてその人の懷に睡りたいと思ふのでした。衰弱した體は廿歲を一つ出た今も肉感的に何の要求もありませんでした。一つは夢の世界を追つて居る樣な性情――一方敎育から來た――はしほ子を子供ら

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しい潔僻の虜にして了つて居ました。しほ子はきれいな繪でも見る樣な心地で肥大なかひ〴〵なの中から濡れた睫を夜通し相手の顏に注いで居る、消え入る樣に清淨な物悲しい自分を描き出し乍ら此處迄來たのでした。

『………いさゝか疎く恥かしとも思ひたらず。さる方にはいみじうらうたきわざなりけり………。』

しほ子は若紫の『いと樣かわりたるかしづきぐさ』を懷しみ乍ら、何と云つてそれを云ひ出す事も出來ないのでした。

『此人は此儘歸へつて了ふ………。』

苦しい愛着に切ない離愁の全量がしほ子の體中を荒れ廻るのでした。とう〳〵しほ子は並木の側の土手の芝生にくづ折れたまゝ、裂かれる樣に苦しい胸を芝の上に摺り付けて身悶え乍ら動けなくなつて了ひました。額に芝の芽がちく〳〵痛かつたとしほ子は思ふのでした。

『行きませう。ね。行つて皆お話しませう。』

斯う云つて傍に蹲くまつた男の大きな掌の感觸を今しほ子は背中に感ずるのでした。

しほ子は溜息と一所に目を開きました。此麼思出が華かなのか、儚ないのかは解らない

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

のですが、小さい折の疵あとがいつ迄もその時を思ひ出さす樣に、この思出もしほ子の一生には消えないまぼろしとして只一度の經驗だつたあれこれを殘すのだらうと思ふのでした。そして寂しい快さを其中から見付出す事が出來るのでした。

しほ子はあまり長い間日光に頭を曝らして居たので立ち上つた機みに額から後頭へかけて一直線にずきん／＼脈打つて痛が傳りました。しほ子は齒を喰ひしばつてこめかみの筋肉を引つらせ乍ら、茶間を避けて部屋に歸りました。茶の間から洩れて居た話聲で伯母の來て居る事をしほ子は知つたのでした。

すばらしい銳利な刄で眉間から眞二つに頭を斷ち割つたら夜の明けた樣な快さを感ずるだらうと思ひ乍ら、それでもしほ子は茶の間の雜談の中へ這入らなければなりませんでした。

『伯母樣それではお忙しうございませうね。余り早急ですもの』

『貰ふ方ですからねそんなに忙しい事もありませんよ。さうは云つてもこの頃は出て許り居るんですよ。今も松本さんへ行つて來た處なの』

と云つて伯母は何やらをかしさうに笑ひ乍ら細い煙管に煙草をつめました。母が

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『何かありましたの』

微笑み乍ら自分とよく似た人の顔を探る樣に見ました時、伯母はとんと煙管を叩きました。

『幸さんの達磨樣つたらないの』

しほ子は伯母のさもをかしさうな笑顏を見ると、何だか分らないが自分もをかしくなつて、

『幸さんがお仲人ですか』

『まあこの人は、幸さんはまだお一人ぢやないか』

母に斯く云はれるとしほ子は成程と思つて猶ほゝ笑まれました。

『幸さんは永らくのお知合だけと松本さんは家ぢやよくは知らないんですよ。それでも今度は彼方へお願ひする事にしたんですの。今日ね、幸さんが何でも達磨樣を見て呉れつて云ふから彼の人の部屋へ行つたんですよ。まあ私は幸さんの小供なのに呆れて了つて……

…………』

『猛さんより下なんでせう』

伯母の茶枕にお茶をつぎ乍ら母が口を入れると

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『一つ下でしたかね。まあお聞きなさいよお部屋中が達磨様なの』
『何にしますの其達磨様は』
伯母は自分の妹に向けた顔をしほ子に向けて
『何にもしないんですとさ。あれが何になるものですか。大きな本箱の上に並べ切れないで床の間中が眞赤な着物着て居るんですよ。それ丈けかと思つたら押入が三尺すつかり達磨樣』
伯母は一度驚いた驚きをも一度此處で驚いてから聲高に笑ひました。
しほ子はあの頑丈な幸さんが赤い達磨をと思ふとぷつと吹き出して了ひました。とこめかみからこめかみへずんと金串の様なものが貫きましたので、狼狽てゝ兩手を上げました。
『頭が痛いの? 頭痛膏でも貼つたら……………まあよくそんなにお集めになつたものですね。皆同じいんですか』
母はしほ子と伯母に話し乍ら鐵瓶に水をさしました。
『皆違うんですよ。それが御自慢なんですもの。一つだつて同しのはありやしませんて大自慢なの。女中さんの話が面白いぢやありませんか。毎日のお掃除に釆配かける度にぴよこ／＼跳り出すには困りますつて。彼方向きや倒れたまゝにして置かうものならもうお小

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

言なんですからだつて』

皆が堪らなさうに笑ひ出しました。澤山のおきあがりが一時にぴよこ〳〵ぴよこ〳〵跳り出すのを目の前に見る樣にをかしがるのでした。

『ほんとにをかしな人。そしてこの中でどれが一番いゝ顏だかなんて云ひ出すの。そんな見分けなんか付きやしませんよ。それでも床の間に丁度これ位（指で二寸位の高さを示して）の燒物のが一つい丶顏して居ましたよ。揚子揷にでもなつて居るんでせう屹度』

しほ子がおやと思つた時

『矢張りおきあがりですか』と母が尋ねました。

『いゝえ、鐵鉢を抱へて大變古めかしい色に燒いてあるんですけど、その鐵鉢が揚子揷とても云ひさうな工合なんですの。市岡さんが置いて行つたとか云つて居ましたつけ』

しほ子は急に暗い氣持になりました。

『達磨樣にお願をかけますね。幸さんのはそんなのでもないのですか』

母は何處までも只不思議で仕樣がない樣に見えました。

『只子供なのね』

伯母は始めから終り迄子供で解釋を下すのでした。暫くしてしほ子は

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

『幸さんその達磨を私に下さらないでせうか。下すつたら私病氣平愈のお願をかけたいは』

母親はしほ子の顏を見て寂しげに笑ひました。伯母も氣の毒さうに

『お貰ひなさいとも。でも皆兩眼があるのよ』

『あつてもいゝは。下さるかしら』

『下さるとも、私が貰つてあげませうよ。明日氣分がよかつたら出かけて來たらどう？明日はね幸さんがお母様代理で結納持つて來るんですとさ』

『をかしござんすね』

しほ子は何だか譯の解らない返事をし乍ら頻りに蒼い手の甲を撫てゝ居ました。

しほ子は京都からの歸りに疲れた体を市岡の快い國府津の二階に休め乍ら、淸水の燒物屋を一軒々々見て歩いて貰ひ集めた玩具を一つ一つ並べて市岡に見せました。小指ほどの觀音像や一休や西行や小さなお面などの燒物を伏紗包みにして京都から汽車の中をしつかり手に持つて壞さない樣に大切にして來たのを誇りかに話して喜んで居るしほ子を見て、市岡も面白さうにおどけた氣分になつて其中の達磨に小さな壬生のお面をかふせたりして

一緒に興し合つたのでした。團栗の樣に見張つた目と目の間に深い八の字をよせた恐らしい顏が、やさしい翁になつたり、巫山戲たひよつとこになつたり、恐ろしい盤若になつたりするのが他愛もなくをかしくて二人は仰山に笑ひつゞけました。

『盤若が一番よく似合ひますね』

『をかしいですね』

しほ子は夕方市岡に送られて又汽車に乘つたのでしたが。其時市岡は達磨を懷に入れて居ました。

『これ僕が頂いて置きますね』

などゝ云つたりしました。

しほ子は中で一番氣に入つて居た達磨を手放すのが可なりに惜しいのでしたが、市岡に斯く所望されるのも決して嬉しくないではありませんでした。それでも素直に直は承知せず何とかすねたり逆らつたりして居るうちに、市岡もしほ子の遊戲衝動を弄ふ樣に、隱したり出したり高い處へ上げたりしてぢらすのでした。

しほ子は今迄その達磨をさう思ひ出した事はないのでした。その達磨が怎んな日を送

つて居樣と、誰の持物になつて居樣とそれは如何でもいゝ筈なのでした。强ひて市岡と達磨とを結び付けて置かなければならない事は何處にもないとしほ子はよく知つて居ました。それだのに今幸さんの手に移つて居ると云ふのがしほ子には矢張り投げ出された樣な馬鹿らしさを感じるのでした。はぎれ出された樣な寂しさもまぢつて。

彼麼小さい物を滿洲迄持つて行くのがそれ程の邪魔なら石に叩き付けて壞して行けばよかつたものを。自分に入らないものを何故人に遣つたのだらう。幸さんの澤山の無意味な達磨の中に彼れも無意味に押込んで置く方が、粉微塵に碎いて了ふよりは增しだと思つたのかしら……しほ子は市岡が自分を如何思つて居樣かなどは考へやしないのだ。彼の方は彼の方なんだから…………と思ひ乍らも過ぎた形見に何の愛惜も伴はなかつたと云ふ事は矢張り寂しいのでした。あんな詰らないものが滿洲の果てまで持つて行つてあつたら、そして每日彼の方のお机の上にあの大きな目で彼の方を眺めて居たら…………其麼事がしほ子には矢張り望ましい、望ましい事なのでした。

『だつて無頓着な方なんだもの』

此麼云譯はして見ても矢張り、春雨に降り込められた樣なじめ〳〵と陰氣な氣分に滅入るのでした。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しほ子の痛む頭の中を出たり這入つたり出たり這入つたり達磨が往き來して居る夢が醒めた時、しほ子は伯母の家へ出かけ樣と思つて床を離れました。

空は昨日と同じ樣に晴れて、太陽も同じ樣に偉きく光つて居ました。

しほ子はぐづ〳〵して行きたい心と行きたくない心とをもつれさせて居るうちに晝前が過ぎて了ひました。强照な日の中を電車で走る事を考へると出る氣がなくなるのでした。その前にもう髮を結んだり着物を着換へたりする煩はしさを考へなければならないのでした。漸々の思ひで一時過ぎに外へ出たしほ子は、町並みの有りとあらゆる滑かなものを强ひ日光の反射するので、眉と眉との間の痛くなつた頃伯母の家へ行きつきました。汗ばんだ膝の上に袂を重ねてお祝物のお禮などを伯母から聞いて居ますと

『しほさん。牛乳の寄物がぶる〳〵慄へ乍ら、達磨樣貰ひに來たの?』

猛の聲につゞいて幸さんも書齋から出て來ました。

『何ですね、しほさんはわざ〳〵お祝ひに來て呉れたんぢやないかねえ。』

『しほさん余り家に許り籠つて居るから、御覽、顏迄牛乳色になつた事。』

猛はしほ子の樣子を見ると屹度ミルクジエリーを思ひ出すと云ふのでした。眞白いお皿

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の中の眞白い寄物の様なしほ子は、膝の上で紅絹の振りをさすり乍ら默つて笑つて居ますと、

『お體は如何です。達磨位で御平癒の御役に立てばお安い事ですが。』

幸さんは恁う云つて側から笑つて居ましたのでしほ子は何となく極りの悪い思ひをしました。

『一ッ達磨一臺……。』

『結納ぢやあるまし――。』

『アハヽ・ヽ幾等お安い御用でもあの達磨が皆引越しちやしほさんの方で大弱りだ。だけと君のは皆眼の玉が二つあるんだね。』

『ウン、しほ子さん眼が入れてあつてもいゝんですか。いゝなら直お送りしませう。』

しほ子は、別のならほしくはないのでしたが若し幸さんか何も彼にもを知つて居て達磨を貰つて居るのだつたらとても自分は彼れがほしいと云ひ出す事は出來ない。と思ひ乍ら只點頭いて見せると

『幸さん、しほ子はあのいゝ顔の達磨がほしいらしいんですよ。市岡さんの置いて行つた。』

しほ子は振仰ぐ勇氣がありませんでした。眤と目を膝に落し乍ら注意深く次ぎの語を待

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つて居ましたが幸さんは

『あれですか……。』

と云つたきり笑つて居る樣でした。

『彼奴か、いやに古色愴然と汚つたない奴だらう?。』

『あれは瀨戶物だし、小さくていゝ格好なんだからしほ子さんには丁度いゝんだけれどなあ、市岡の奴よけいの事云つて行つたんだ。』

しほ子は幸さんの顏から何か讀む樣に振仰ぎました。つとめて平氣を裝はふとするのでしたがそれでも乳色の顏に幾分の紅をさして居ました。

『何?。』猛が幸さんの語を受けると

『彼奴ね僕の形身だと思つて吳れ給へなんて云つて置いて行つたのさ。』

『巫山戯てるね。』

『まるで生別れの樣ですね。』

『無論冗談には間違ひないけとね、何だか不思議に彼奴を見ると市岡の形身だなあつて氣がするのさ。』

幸さんは何の意味もなささうでした。少しも人の腹を探る樣な嫌みな容子はなく、三本

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の指尖に伯母の煙管をのせてくる〳〵廻して居ました。しほ子は安心した様に口を入れました。

『鐵鉢を抱いて居ますつて？。』

『君、あれ鐵鉢つてのかね』と猛に云つて

『何ですか大きなお鉢見たいなものを抱えて居ますよ。』

『左うでせう。』

『えゝ。』

『眞黒かありませんか其鉢は。』

『達磨の戸籍調べだね。』

『しほさん貴女知つて居るの？。』

伯母と猛の言葉と一緒に幸さんは

『えゝ、眞黒です。そして中は白いんです。』

と云うて「御存じなんですか」と付け加へた。

『はあ。昨日伯母さんにうかゞつた時から私が京都から歸る時汽車の中で壞した達磨によく似て居たと思つたんですよ。』

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

しほ子は其頭よりも大きな鉢が揚子入れなのだらうと云つた市岡に、揚子など入れたつてつまらない、インキ壺になさいなといふと

『其麼汚いものを入れるのは嫌やぢやありませんか。何にも入れないでいゝですよ。』

と云つた詰らない言葉迄が其時は堪らなく嬉しく思つた事などを考へて居るのでした。

『ぢや清水燒なんですかね。』

『皺の凹んだ處などが汚らしく黑ずんでは居ませんか。』しほ子は少し大膽になりました。

『いゝ色に古ぼけてるんですが情けない事にや拭けば落ちるんですよ。』

『えゝ〳〵。それぢや同じですは。清水の坂を一軒々々歩いて買ひ集めた色々のお人形の中で一番氣に入つたのでした。もう坂を下りてからまた一寸戻つて買つて來たんですのよ。』

『ぢやあの時一休や西行と一緒に買つて來たの。如何して又それ丈け壞れたのかねえ。』

『側の人の荷物とぶつ突かつて首がかけましたの。仕方がないから捨てゝ了ひましたけれどほんとにいゝ顏して居たんですよ。幸さん是非私にそれを下さらなくて。』

しほ子は急にあの時の達磨に對する執着が湧くのでした。しほ子は坂を下りてから連れの人を待たして、直一人引かへして坂の中途の店でその達磨を見た時の面壁何年だか物恐

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ろしく見開いた眼が大悟の導きに輝いて居ました。しほ子は小さい姪達に
『この叔母さんはやゝはん見たいなあのばあつかり買つて來やはるなあ、叔母さんこの達摩樣壞したら泣きやはりますの。』
笑はれながら達摩をいぢつて退屈な日を暮して居たのでした。
『私ほんとに氣に入つて居ましたの。』
しほ子は誰にともなく同情を求める樣に云ひました。
『さう云ふ譯なら上げませうとも。あの達摩に未練があるのぢやないんですけど、只市岡の言葉が邪魔になつたんですよ。』
しほ子は形見などゝ云つた市岡の心持が腹立たしいのでした。あゝ遣つて自分の手から奪つたものが何の形見に他人に殘るのだらう。幸さんはそんな無意味な言葉をさへ忘れかねて居る人だと思つて、何故かしほ子は泣きたい樣な氣になりました。色々の思出がすかれてある筈のあの薄いレースの手袋も今頃は誰の手にか渡つて居るやら……手袋や達摩許りぢやない。あの時あんな事のあつた彼の心持も今ぢや全く別なものに變つて了つて居樣ものを……しほ子は寂寥に取卷かれた中で、ずん〳〵歩いて行く男の後姿の鼠ちりめんの兵兒帶の搖れるのを見て居ました。しほ子は偉大に發育し切つた市岡の肉體が其儘見

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

られる袷時から夏へかけて、少し上目に絞の兵兒帶をきゆつと結んで居る羽織を捨てた姿が好きなのでした。

翌日しほ子は幸さんからの小包を解くと、三寸方形の木の箱から綿のはみ出して居るのを見ました。しほ子はもう達摩を見るのがいやになりました。無暗に何かに反感が湧いて見ないうちに踏石に叩き付けて粉微塵に碎いて了はふと思つて、箱を持て立上りますと、中からセルロイドで拵らへた小さな達摩が跳り出して疊を二枚程先でひよこりと起上りました。しほ子はおどけた馬鹿らしさに前の反感も薄らいで錦をとり退けますと、似ても似つかないおかが屑で拵らへた樣な毒々しく赤い達摩が大きな目を開いて居ました。しほ子は余り馬鹿らしさに腹も立たず取り出しますと底に

何年何月何日　　大師にて

市岡良三之を見出す

市岡の字で橫なぐれに筆ぶとに書いてありました。小さい方には只ペンで新橋博品館にて、と幸さんの字らしく讀めました。

しほ子は火照つた顏に嘲笑を浮べ乍ら幸さんの結紙を開きました。

……歸るまであの達摩はお手許にお送りする積りでしたが、これに向つたら急に市岡

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に歸して遣りたい氣になりました。貴女には何とも濟みませんが重々お詫びをしてこの使と一緒に滿洲へ旅立たせます。あしからず。猶此處に入ましたのは、一つは市岡君と大師へ出かけた時同君が澤山の中から撰り出されたもの、一つは同君を新橋へ送つた時これも同君の見立、兩方とも一寸面白い顏をして居ます。違約のお詫はこれでお許し下さい。』

二つの達摩さまは一人になつた十次郎の隣に陣取つて居ました。しほ子は其處に座つて靜かに雨の音など聞いて居るのが多うございました。（完）

（大原の芝生で）

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

山と海と（日記）——川田よし

八月二十一日

信越の國境の、河原の湯宿の一夜はすつきりした空に明けた。幾重の山の一軒家は、温泉場特有の心安さに殊に、人々の心を親しくつなぐ。朝から襖を隔てゝ話し合つたり、輕く唄などうたふ。

山に行き暮れて涙しそうに寂しくなつて辿りついた昨夜のことは、もう繪を見る樣に美しい遠い物語りとなつた、ほつつりと小さい實をつけた無花果が、たぎり流れる川に枝をのべてゐた。坂をずつと下つて河原に下れば、何處となしに石の間に湯が湧いてゐる。熱いのには水を入れてある。一番岩の間が深く浴客の多い處には一寸した屋根が蔽つてある。朝風に肌をまかせて沈むと、ほろほろと白い砂が浮き上る。姫川の水は五六間山際の涯下を流れて、浴する眼にはたまたま白い水沫が見える。

旅仕度をすつかりして宿を立つ頃は、朝から暑い夏の陽は、湯上りの上氣した體に容赦なくさす。葛の花がぽろぽろとこぼれたり、がやの實が綠に見える峠を幾重屈折しても、山はかなしくはてしない山につゞく。別れて來た信濃の山は、さすがに高く白雲がたなびいてゐる。買つ

Digitized by Google	Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

た牛を連れに行くといふ男と道連れになつた。その男は實直な土地の言葉で山崩れの怖しい話をした。崩れた赤土の中からは、人の手が出たり足が出たりしたといふ、二年經つた今年はもう、其地に綠りの草が延びてゐた。自然界のすさまじい繁殖を思ふ、釣橋でその男に別れてから、またKと二人きりになる。川が荒れたので道は一里もまはつて、峠をこさなければならなかつた。煉瓦を積み初めた發電所は八分通り出來つた許りで、草が繁つて荒れてゐた。其處から山の坊の峠にかゝる。上りは殊に苦しいのに、眞陽はかんかんと照りつける。むせる樣に土や石のほとぼりの面にかゝる時は、汗がしとしとと流れて、胸が燒け爛れる樣に苦しい。杉の木立を空いて涼しい風が下から吹き上げた。もう少しで頂だのに私はもう動けない程疲れた。「頂きに行けば海が見えるかも知れない。」とKは海に焦れぬいて來た私の心を、誘る樣に云ふけれど、私はまだ少し朝露の霑のある草に腰を下して動かない。「おいて行くよ。」「どうぞ。」私は日が暮れても仕方ないと思つた。激しい動悸と蒸し暑さとは五體に喰ひ入つて、いつ復活されるとも解らないほど、疲勞に浸つた。十歩許り歩み出して振かへつたKの顏には、「女など連れて旅をするものではない。」といふ色が見えたけれど、あれ程永く病みつゞけ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

て體に彈力がなくなつてゐたのにそれでも、昨日は健氣に五里の山道を歩いた。今朝はまだ一里許りだけれど私の苦しさだつて、ほんとに私の苦しさをもつと察して下さりそうなものだ――とつくぐ\と見返した。登つて見れば馱々を云つた木影は直ぐ指ざされる程の處だつた。山はなか〳〵盡きなかつた。同じ高さに餘程續いて、低い山がすつと重つてゐる。椿の實が固く落ちてゐる芝の傍の小道は、蘇生させる樣に清い冷たい水を飲みに行くためである。美しい木の皮を飲口にしてある。二人は醉つた樣になつてあつい體を觸れてゐた。

小瀧村は山を下り盡した一平の部落であるけれど、また私達の道は山に封じられたかと思はれる樣に、眠つた人氣のない家は、高い窓を少し開けた許りで、板壁にとり圍まれてぼつねんと亂れてゐた。小瀧川と姫川とが合する白い河原を眼下に見られる家で、晝をすませた。小猫が二疋乳房に戯れてゐた。白と黑のきれいな猫であつた。

それからは川に沿つて道は平である。身なりなどかまはない勞働に染み切つた樣な、越後の女にもたま〳〵逢つた。炭を背負つてゐる者、身仕度をしつかりして山へでも行くやうな風をしてゐる女もあつた。

手紙を讀みながら行く中年の女もあつた

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

「かなりな字で書いてあつたね。」

「妹か姪かが遠く藥賣りにでも行つてゝよこしたのかも知れないね。」

二人はそんな話をした。見なれた山川に別れて、言葉も風習も違ふ旅に二人きりになつた私達は、僅の言葉にも濤の樣な歡びを感じ、人にかくれてそつと腕をまいてさへ初戀の樣な心のおのゝきを感じた。

山が薄くなつて行くときの心持、川が開けて長い長い橋の彼方に海が彷彿として見えた時の心持。何とも云ひ得ない、只丈が無闇に延びて、胸が浮き上りそうになる。疲れた足もカドリールの時にも似て輕く。蜜柑畑があつて家續きになる。

糸魚川へ漸くついた。ペンキの色も白壁もない雪深い町は、白ざけた板壁がたよりない感を持たせる。廣い廂を遙つて歩くのは興味深いと思つた。海はもう暮れて波は白く亂れた。涯しなく涯しなく波を打つ。磯づたひに行くと、旅役者が樂屋の窓から海を見てゐる白い顏が見えた。さみしい心が湧いて來た。夜もまた海に行く。夜の海は美しい。烏賊釣りの灯は海の彼方に遠く、夢の樣に朧にゆれてゐる。砕ける波には夜光虫が螢の樣にかなしく光つてゐる。掬つても掬つても青い光りは指の間からこぼれる。磯の香は涙せよと許りにほふけれど、私は涙が涸れてゐた。私は何とはなしに、Kとの

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

心の隔りを思つてゐた。去年であつたら一昨年であつたら、このまゝ消えても二人ならばと思ふ程に悲しさも、歡ばしさも同一に感じられたであらうに、强く强く心が抱合され融合されても、直ぐ其後から各自の寂しい孤獨が湧いて來た。飢えてでもゐる小犬が、くんくんと啼きながら言葉なく歸る二人の後をついて來た。

青い蚊張には秋の虫がないてゐた。寂莫の後から湧く一倍の戀しさに、Kも私も心がふるへてゐた。波の音は遠くゆるやかに悲しいメロデイを寢耳に響かせた。

八月廿六日

下痢をしたり吐したりして衰へた體も、漸くしつかりした。「海へ入りたいわ、いゝでせう。」甘へ心になつたのが微笑された。

親不知の夜、始めて私は海に入つた。あの水にも夜光虫が光つてゐた。石鹼を溶した樣に肌さはりの柔な水に、胸をおどおどさせながらKにたよつてゐた。岩に碎けて來た小さい波だけれど、二人をさらふ樣に浮かせた。あの波の心持。私はぽうつとする。「五智は歸りに通るんですもの、各濱へ行きませう。」「現金だねほんとに體はいゝかえ?。」「えゝえゝ」

一里の道はいつも右手に海が見えた。二人には別れて來た歌の景色が懐しかつ

た。朝はおはびとりの舟が、一丁許り沖の辨慶の投岩の周圍へ集つた。十一時頃になると越中の伏木から磯づたひに曳いて來た帆船が岩を避けるために、手間どつて幾雙か並ぶ。越中言葉のすうすういふのも時々は聞えた。そして午後になると物を染める程に濃蒼の波の上を、青海から石灰を積んで白帆が風を孕んで、夕日に映えて並んで行く。どちらかと云へば關西系のそれは靜な純粹な漁村であつた。二人はその日のことを限りなく語り合つた。各濱では、外波や歌で見た樣に裸體の人達はなかつた。簡單なものでも子供達迄著てゐた。私は漁村へ來てはじめて、日に燒けた裸體の美を知つた。そして完全に發達してゐる女の體が美しいと思つた、Kは理髪によつた。長い黑髮を鏡に向つて結んでゐた女は、元結を押へながら輕く會釋した。私はもう一つ向ふの部落迄行つて帽子など買つた。

順德院の古跡は小高い丘にあつた。何處の漁村にも、たとへ壞れ掛けた家並の中にでも眞宗の寺だけは石段を疊んであつた。海に生活する人達の悲しい信仰を思つた。

歸ると直ぐ私は仕度をして海へ入つた。親不知に比べれば水が大變汚い。藻が多くて濁つてゐる。今日も隨分浪は荒いけれど岩が多いので私達の所までは來ない。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

敎師らしい人が子供を三人運れて來て遊んでゐた。三人共御揃ひの水泳服をきて浮袋にとりついて戯れてゐた。おひるになると砂の上で樂しそうに何か語りながら、お辨當をつかつた。

「あの下にまだ五つ位の子供と、乳吞子とがあるんだね。貝を拾つて來て上げるよなんてなだめて置いて來たんだらうよ。」

Kには父親らしく子供に對してゐたのが興味をひいたらしい。

夕方になるとまた私は寂しさにたへられなくなつた。M先生の處へ行つたKはもう二時間にもなるのに歸つて來ない。『背敎者ジユリアノ』にも興味が切れてから湯あみもしたけれど、待つ間は久しかつた。一緒に居れば我儘になつて意地を張つたりしながら、たつた一二時間でもひとりは寂しい。

今日ゎはつちやんは停車場の構内で、ほうせん花の實をつぶしてゐた。はつちやんは下ぶくれの、内藤伸さんのよく彫刻なさる女兒の樣な、可愛い六つの子だけれど啞であつた。私は禾木科の草の穗を拔いて、箒をこしらへた。はつちやんは一生懸命になつて、一本一本拔いては持つて來た。もし道を通る人が一人でもあれば、きつと私の手を曳いては「あゝあ」といつて私が見向かなければ承知しなかつた。

Kは歸つて來た。二階から私達二人をち

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

つと眺めてゐたけれど、私は歸りたくなかつた。Kに氣まづい想ひをさせる樣に私には云ひ解かれない寂しさがぬたうつてゐた。私は、はつちやんを抱いた。重くて筋肉が緊張し切つてゐた。頰ずりをしてやると、たよりなく頰を少こし笑はせた。笑つたことのない兒だといふ。

「はつちやんさよなら」

日も赤く沈んだ。すつかり暮れても、はつちやんの蒼白い顏はほうせん花のあたりに浮きぼりの樣になつてゐた。助役さんの總領娘で四歲位の弟の頭は押壓された樣に平くなつてゐる。

八月廿七日

しぶきのやうな雨がさみしい、この海岸の驛を通り過ぎては冷たく肌に秋を感じさせる。思ひ出せもしない慕を淡い心持になつて、考へてゐた。心も體も旅疲れしたのかぐつたりして、枕に手をかけて見たけれど起きる力もない。高い激しい浪の音も苛立せはしない。浪の音がいやだ。うるさい。磯の香は吐しつぽい。燕か赤倉の湯へ行つて、體をしつかりさせて歸りたい。と意地を張りつゞけたのもはしたけれど、また今朝は閉された心になつたらしい。

ふつと思ひ出したやうに心を靜めて聞くと、先程迄隣の室でM先生の子供と話をしてゐたKは、何處かへ出かけたらしい。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私がほんの一寸の間、うつとりした間に。ふらふらしながら机によつたけれど、何も手につかない。今朝話していたゝいたクップスの美學のノートを無意識に弄んでゐた。Kの日記があつた。私の心は緊張して來た。二人が別れてゐる頃のを讀んで。そこには私をもう思ひ出さなくなつた日の多くなつたことや、過ぎては美しい前の戀人の追憶が、樣々に湧いたことなどあつた。私は胸がきりきりして來た。Kがそんなことを思つてゐた頃は、私はまだ期待しなかつた體の變化をKには知らさずに、死ぬ思ひで永久に、Kに別れて旅立たうと定めては泣きつゞけてゐた朝夕であつた。

ほんとにKは全人的の愛を注ぎ得る人かしらん。私に感じられないきりなのかしらん、萬一兩方共全人的の愛を注いでゐるとする。だのにお互に共愛を想ひ得ないとする。そして二人は相愛の人だとする。

一體そんなことがあり得べきことだらうか。私はもう考へ續けられなかつた。女は戀愛そのものだけれど、男には生活の一部であると云ふことが、戀の悲劇なのだ。私の樣にあまりにローマンテイックな戀を要求するものは、其對象はまだ戀を知らぬ青年か、でなければ人間以外のものに置かねばなるまい。けれど對象をK以外に求められない私は、やはり人を

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

離れた旅が、隱者の中に逃れなければならない。私のロマンスの最後の隱れ家であつた。何はともあれそれのみは疑ひもない眞の二人の所有にならうとした肉體は、此世の光りを知らないで永久に失はれた。それを思ふと二人の内に一段落がついた樣にも思へる。私の眞の愛を求めるために旅立つ巡禮姿の私が眼に立つ。せきとめられた涙が一時に流れ出した程にほろほろと熱い頬を傳ふ。

「けれど一人はいやだ」私は自分の不意の聲に驚いた。萬一私に對する愛が悉皆Kから失はれたとすれば、私の愛の存在として見てゐるKを、私は私の力で失はなければならない。蒼い水が澱んでゐる。「底のない瀧壺なんだよ。」無心に窺いてゐるKを突き落す。つゞいて私も後から恐怖に慄えながら若が影は微笑をもたせる。深山の燃えた眞赤い椿が其日から、蒼い水面に浮いてゐる。日に一度づゝ白金の翼の鳥が其花を觀て悲しい戀のうたをうたふ。——

女中が膳を持つて來たけれど、一人では箸とる氣にならない。間もなくKが歸つた。涙に亂れた私を一寸見たKの顔には深い沈んだ色がさつと流れた。私はうれしいのか戀しいのかたゞ涙が新らしく拭いても拭いても流れた。私はKがあつての存在である。戀しいのである。片時も見ねば寂しい程愛して居るのだ。私は私

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

の愛の白金の翼を大膽に擴げなければいけない。そしてＫの沈んだ色、疲れた色を幸福に、歡喜に代へなければいけない。しつかり抱いて涙を吸つた男を、愛にもえ立つた瞳で私は凝視した、二人は子供の樣な純な笑ひに融け合つた。雨も晴れた。海は濁りを增して沖迄黑んでしまつた。「Ｍ先生がひとりきりにするなんて殘酷だといつたよ。一緒に行かう。」丁度夕陽が幸に海に沈む時であつた。海へ來てから始めての美しい夕陽である。山の漆の葉はいつの間にか黃ばんだ。思ひ出した樣に涼しい風がわきあけから肌に感じる時は、虫の音も露けかつた。南瓜の花は黃昏にはさみしく眼に立つ。この花は何處にも咲いてゐた。砂丘の雨の中にも、涙にくれた裏山の少し許りの平地にも、そして手をとり合つて行く此夕べの畑にも。Ｍ先生の宿は直ぐ海に向つて建てられた離れであつた。心よく空氣がぬれて、皮膚のあることをしみじみ感じる。肺の細胞さへ感じられる樣な氣がした。男許りの中の私は、始終心持顏が紅らんでゐるやうに思はれた。

その夜

Ｍ先生は友達二人と宿の女中と一緒に來られた。私達は宿の男を連れて、皆で直江津迄盆踊りを見にゆくのである。宿の男を私達は十六七だと思つてゐた。體に似合はないませた言葉を使ふのが不思議

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

に思へた。「東京に少し居りましたから」とは云つたものゝ。話のついでに「今年は檢査でござんす。」と云はれてKと私は顏を見合せて、ふき出しそうになつた。そう云はれゝば鼻の下にこはそうな毛が少し延びてゐた。

「奥樣あの灯の見える所が五智で。……あ、そでござんす。もう直きですよ。」もう靜つとして居られないといふやうに話かけた。私は「奥樣」と幾度も呼びかけられるのが厭はしかつた。實際私は自分を所謂妻だと思つたことはなかつた。Kに對したつて夫だなんて思ふことさへ滑稽である。普通の夫妻が顯す氣分より、特別な心持である。そうかと云つて若い血をおのゝかせた戀人も應はしくない。二人の關係を云ひ顯す言葉はないけれどとにかく奥樣と云はれる度に、自分のことかと漸く相手に顏を向ける程であつた。青い光りが曇りの夜に吸ひ込まれて、ボーッと蒸氣を吐く音が地の底にでも流れて行く樣に、北國の停車場はこの夜ながら物寂しい。それでも町を一二丁行つたあたりから、荒い單衣や水々しい髮の女の往來が増して來た。何となく動いて來た、街には、赤い燈籠が點つてゐた。踊りは遊廓に立つた。

三方から流れて來る明りは、廣場に踊る男女の白いもの許りをほつつりさせた。ざくざく砂に足を揃へて、なだらかに拍

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

手しては醉ひつくした樣に、蒸れた唄をうたつた。私は旅愁とでも云ひたい淡い哀れに身をそゝられた。そして向ふの家を一重越せば、限りない暗い海に續くのだと思つて前を動いて行く人達を茫然見てゐた。印袢纏に白い腰卷に白い三尺の女は艶にすなやかに踊つてゐる。娼妓だといふ。蛇の目を思ひきり大きく染め出した浴衣は、場所柄心地よいものであつた。蒸れる樣な空氣の中に、若い男女は手をとり交したり、笑顏で私語したりして踊りの後にかくれてゐた。ふと空を仰ぐと、一つきり青い星が輝いてゐた。次第に空は澄んで行く。無數の星は燦然と光を放つ。踊りはくづれたり組み直したりした。明るい灯に吸ひ寄せられる樣に私達は、華な軒に立つた。透廉の色、格子の樣などかうした場所に限り見られる心よい趣があつた。隣りからは太鼓の音がもれて來た。間もなく雛妓の踊る影が二階の明るい障子に寫つた。幾組か別れてゐるのが大きくまとまるのは、一時頃からだと云ふので私達は歸ることにした。宿の男は「奥樣これからがものでござんす。三時の滊車にしては如何です。私も一つ踊ります。」といつてとめたがつた。M先生の方の女中も殘ることになつた。其頃から活氣づいた男女は聲の色まで變へて搖ぎ立つた。踊りの方へ人を失つた諏訪神社の境内は寂しかつた。露店

はかたづけ始めてゐた。カンテラの佗しい黒い煙は、所在なげの果物の上に流れた。稲のみのるにほひのする道は、間もなく山道になつた。鄉伴灣の白い波頭は時々白金のやうに輝いた。あの男女のどよめき。Kと私にも醉つたやうに若々しい戀が流れてゐた。思ひ出した樣に「明後日は海にもお別れねえ。」といつた。白い足袋が眼に痛かつた。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

わかれ—齋賀琴

別れてはや一年を經ぬ死がたく生きがたき日の今日に續ける

夢にだにかなしきことを云ひあへずかなしきがまゝ別るゝと見ぬ

かりそめの別れとのみ打ち消して君何事もこたへ給はず

再びは語り草ともなるまじきかりそめごともなみだ流るゝ

そのかみのそれの日君と歩みけるこの松山の今日のしづけさ

やむ父をみとりの爲めの旅ながら旅なることにうれしかりけり

ましぐらに夏野をかけるわが汽車のけむりをとほく思ひさびしむ

すみなれてかなしきことのかず〳〵を訴ふるさへまれになりゆく

まれに會ひまれに語れるさばかりのうきなぐさめの仇なりしかな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

人間と云ふ意識

野枝

十月號掲載の岩野清子氏の「個人主義と家庭」と云ふ論文を讀んで私は或る點については全く私の考へ方と同一であるのを見出したけれど他の方面に於いて私の考へてゐるのとは可なりに違つてゐることにおどろいた。そうして私はらいてう氏の感想を讀んだ。氏の云つてゐられることはまあ私の云はうとしてゐることである。私はだからそのことについては默つてゐやうと思つたけれど矢張り滿足が出來ないので書くことにした。然し私は岩野氏の思想について云々するよりも多く自分の考へについて云ひ度いと思ふ。また實際私は他人の思想に立ち入ることは好まないから。たゞそれに依りて考へさゝれた私の感想を述べやうとするのである。私の考へてゐることゝ岩野氏の思想の何の點に相違があるかは讀む人の判斷にまかせる。私はたゞ岩野氏の論文によつて考へさゝれた事で云ひたいこと丈けを云ふ。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は如何なる場合ひにも自分の考へてゐる事に對象を置き度くない。それは今の私たちの生活ではむづかしいことではあるけれど。否むしろむづかしいと云ふよりも夢想であるかもしれない。考へてゐることが外面的に表はれたときにはどうしても何かの對象が現はれないでは濟まないけれどもその發想に何の對象も有しないと云ふことはうれしい事である。

私は常に他人との接觸に何時も幼い時から私について𢌞はつてゐる習俗的なあるものが殆んど絶えずつきまとつて私を苦しめる。私はこの頃それがだん〳〵深味へ入つて來たことを意識してゐる。それは重に家族との交渉である。私の所謂姑と小姑とその夫たちと私の或る間接な關係から必然に起つて來る接觸である。明らさまに云へば私の今なやんでゐる問題はそれである。この家庭の問題では私は岩野氏以上に苦しんでゐること斷言し得る。私は常にその事で惱まされてゐる。私の日常生活を知つてゐる限りの人は皆その事を知つてゐる。私はその問題に對して自分の心弱さが腹立たしくて耐らない。私は私の當然とるべき道はすつかり知つてゐる。けれども私に最後までまつはつてゆく私の他人に對する弱いこゝろづかいがつい思ひあがつた私の決心をにぶくしてしまふ。それには或る程度にまで私の心の中に侵入して來てゐる夫の心持ちも多少は手傳つてゐることは勿論である。私は

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

殆んど毎日その問題になやんでゐる。そして私の優しい友達は早く私がその境遇を捨てゝしまふことをすゝめてゐる。これも勿論はやく捨てたい。けれども私はこの頃になつて自分の問題がだん〳〵と生長して來たことを意識し出した。それは自分と云ふことが人間と云ふことに變つて來たことである。置かれた處によるのかもしれないし私は今迄たゞ自分かぎりの他のことについて考へなかつた。自分がどんなにも小さいものだかと云ふことがわからなかつた。自分と云ふものが本當にどの位廣い大きなものに結びついてゐると云ふことに氣がつかなかつた。前に云つた私のその問題について私は隨分ばか〳〵しい努力やまたは犧牲を拂つた。そして私は不滿だつた。私はその不滿な爲めにいろ〳〵にその解決方法を考へた。併し一つも他人の氣持はさし置いて自分の意に滿つやうな氣持のいゝ解決方法はなかつた。嘗つて私が私の兩親や血族に向つてした方法より他はなかつた。私はその苦い經驗をまた繰返さねばならない。それはまだまざ〳〵と私の記憶に殘つてゐる。どんなに私の涙がその爲に絞られたことだらう。私たちは何時までこんな馬鹿々々しいことを繰り返さねばならないのだらう？　しかもその爲めに私は極度まで疲勞しなければならない疑惑と怨嗟の渦が私を捲き込む。私はそれと戰はねばならない。そしてその努力が決して終局ではない。と考へたとき私は今迄私の考へてゐたいろ〳〵な細々した問題が不

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

意に暗い大きなものに出會つたことを感じた。私の考へてゐたことが皆その暗に吸ひ込まれた。それは私一人が考へてゐる問題ではなかつた。否問題ではなくこの大きな暗が私の上に投げた不快な陰影に過ぎなかつた。私は今こそ本當に直接にヒタと本當の問題に出會はした。それは社會と云ふ大きなものに包まれたいろ〳〵なものについての疑問である。それは痛切な私の問題である。それは無論他人の問題をも含んでゐるに違ひない。一人の私が直接した問題であり數萬數億の人の面前に迫つてゐる問題である。そうして私は眞實に自分の孤獨と云ふことが今迄考へてゐたやうに狹くも何ともないことを發見した。その孤獨は自分一人丈けの孤獨でなくあらゆる人をとり卷いてゐる孤獨であつた。もつと廣い深いものであつた。あらゆる事物を包含した偉大なる孤獨であつた。私の今迄の考へ方はあまりに狹く小さかつた。私は今迄足元ばかりを見詰めてゐた。漸く私は人達の所謂社會問題を自分の問題として考へることが出來るやうになつた。小さな私の問題が擴がつた。そして深い根ざしを持つた。そして私の問題の解決は六ケしくなつてしまつた。私はあの暗を燒きつくす火が欲しい。それですべては解決する。私は自分で燃す火力を充分に猛烈にする爲めに蓄え得らるゝ限りの燃料を蓄へなければならない。私はもつと苦しまなければならない。私はあらゆる苦しみで自分を苛み自分に對するあわれみの心をもつと深刻にしな

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ければならないそれは直ちに多くの人に對する同情がなくてはならない。私のやうな心弱いものでは到底その道より他はない。私はだからどんな小さな苦しみでも拾つてゆかうと思ふ。もつとこの社會問題の痛切に自分の問題として他を待つてゐられない程に迫つた氣分になる日を私は待つてゐる。私のこの氣持ちがどう云ふ風に育つて行くかわからないが私はいま本當にあらゆるものを肯定する丈けの廣い心持ちになつてゐる。私のこの心持ちが何の努力もなしに私の日常生活に迄深く及ぼすことが出來たらどんなに幸福だらう。そしたら私は如何なる場合ひにも他人に何にも求めないで濟む。併しそうなるには可なりな時と努力をまたねばならぬ。なほこれから後も私の日常生活は今迄とおなじ馬鹿々々しいこと、忌々しいこと、口惜しいこと、嫌やなこと、悲しいことで持ち切るかもしれない併し私の考へが前の程度に迄進んで來たから私にわづかの考へる時間がありさへすれば私は別に苦しいことはない。私はそれらを唯一の燃料としてとり入れることをはげまされるだらう。私はいくらかの時丈け他人の行動や言葉に對して不快である事に度々出會ふだらう。けれども私はこれからそれを氣にすると云ふことよりもそれ等を包んでしまふことに努力するだらう。今、私は私の心の動き方にぢつと目を注いでゐる。私には今自分と云ふものが限りなく廣い偉大なものに思へる、——否自分と云ふ關門を通つて出た人間の世界

と云ふものが――。それは今迄全然わからないでもなかつたけれど今私が感じてゐる程眞實に、又近く、痛切には感せられなかつた。それは自分と云ふ足元を視點としたボンヤリした視野であつた。

三、一〇、二五、

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

結婚に就いて兩親へ

自分に結婚を強いる前に兩親は是非是等の事を頭に入れておいて戴きたいのです。

結婚は其の當人の自由意志で定るものと、自分は確信して居ります。從來の親達は、自分等の娘を結婚させるのに、まるで通りがかりの、屑屋を呼び入れて、不用品を賣拂ふ樣な態度で（勿論親達自身は、娘の將來に幸多かれと切望するより何ものも無いのでせうか。）輕々しく、ひとり定めをしてしまひます。そして、娘に對して、命令的に結婚を強いるのです。

お江戸時代の娘、華やかな外面ばかり夢見て居た時代の女ならば、自我を無視された結婚でも、世間の手前兩親への義理などゝ云ふ因襲的な型に、打ち込まれて、どうする事も出來ず、あたら大切な生涯を、つまらない生き甲斐のない、生活をしなければならない。然し自我尊重の觀念が乏しかつたから、多少の不平は抱きながらも、兎に角屈從したのです。けれど今日の我々若い女達は、兩親よりも、兄弟よりも、總て世の中の何者よりも、自己を愛し、且つ尊重して居ります。因襲を打破する事の出來ない、親達は、自己を愛し、且つ尊重する觀念が充分に出來て居る、自分等の娘に向つて、諾否の時日も與へずに定めた、結婚に屈從させやうとしたつて、とても不可能な事です。

子供は最も幼い頃は自己がありませんから、兩親の人形になつて居る事が出來ます。然し少し大きくなれば、自己が出來ます。其時になつて、兩親の云ひなり次第にしやうつたつて、自我の觀念が、さう何時迄もお人形さんにはしておきません。其れ故世の中に、理解する事の出來ない親子關係が、土臺をなして、幾多の悲劇が生み出されるのです。

自分達は、社會の位置、職業、其他幾多の、若い女の虛榮心を、そゝる樣な行爲や言葉を餌にして來る、恐ろしい、トラップにかゝらないだけの用意が必要であります。

基礎となる思想が出來て居れば、親達が自己の目前にしつけた、結婚問題を選擇するだけの頭が出來て居ますから、安全です。然し其場合に尙親達は、自分等の娘の自由意志を尊重して與れないでは困ります。

世の一般の親達は子供が親の意見に反對する場合があると直ぐ不孝者呼ばはりをするのが例です。

一體子供は、兩親に對して孝行をしなければならない義務があるのでせうか。又親は子供に向つて、孝行を強いる權利があるのでせうか。

自分は、兩親でも、兄弟でも皆社會の一員であると考へます。個人の集りではありませんか。二人の異性間に生れた子供に、一生獨立する事の出來る迄に養育する必要

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

はあります。けれど、其れから先きに、其の義務的養育の報酬なる孝行を強いる權利は毫も無いのです。

世の中に生れて來方に遲い早いの差はありましても、皆同じ人間てはありませんか。何年か先きに子供より生れて來たからつて、格別親風吹かして、何事にも子供を屈從させねばならない、などゝ云ふ馬鹿な話は無いと思ひます。

自分は兄弟に對しては、いつも赤裸な心持ちで接する事が出來ます。けれど兩親に向つては、自己を開け放して接する事は出來ないのです。親子間にこの樣な懸隔があると云ふことは、大變不幸な事だと思ひます。

此んな事は、自分として、一夕お話しついでにでも、兄弟にならば何の憂もなく話す事の出來る事柄です。然し兩親に向つて、これだけの事をぢかに話したなら、兩親はどんなに、自分を誤解するでせう。然し自分ばかりでなく、今日の一般子供は此の位ひの事を思索するだけの頭が出來て居ります。今日では、親の犠牲になつて、自身は目をつむつたまま心にもない人の所へ嫁ぐのが、えらいなどゝ云ふ考へを持つて居た時代とは、時世が違ひます。近松の世話物によく出て來る樣な、たやすく自分を捨てる事の出來る女は少くなりました。否少くなつたと云ふよりも皆無でせう。それだけ女も自覺して來たのです。

世の中が文明的になつたのです。

兎に角結婚は生涯の事ですから、なか〳〵一朝一夕に定められるものぢやありません。

親達だつて、さうぢやありませんか、自分等の愛する娘の生涯を任する男を選擇するのに、見ず知らずの者に對して、仲人の言や、其人の周圍を調べた位ひで何の不安もなく、結婚させる事などがどうして出來るでせう。然し事實は從來さうなのですから、驚くよりほかはありません。

こんな不自然な結婚を娘に強いて置きながら、嫁がせる時に親は二度と再び生家の敷居をまたぐな、と言ひ付けます。其れ程死場所から去らせたくはないのでせうか。

我が國に是れ迄離婚者の多いのは、一般の親達があまり結婚を輕々しく視て居る故です。

自分は人一倍自己を尊重します。其れ故從來の結婚法は身が碎かれる程不安に感じます。親達は娘の生涯をもつと〳〵尊重して欲しいと思ひます。

女兒を男兒と同等に見成す樣になる迄には未だなか〳〵時日を要するでせうけれど、此のいまはしい因襲を少しづゝなりとも打破してゆきたいと考へます。

おそらく自分ばかりでなく一般の自分位ひの年頃の女はこう云ふ考へを持つて居る事と存じます。

——大正三、九、一六——

岡田ゆき

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

松本悟郎氏に答ふ

野枝

私が十一月號の編輯を終らうとする時に突然第三帝國で私はあなたがわれ〳〵同人にお書き下すつたのを拜見しました。私は十二月號でその御返事をしやうと思ひました。けれども今朝になつて私はどうしても直ぐに書かないではゐられなくなりましたから委しくは書けませんがあなたの仰云つた諸種の社會問題に對する私の考へを書いて見ます。勿論私はもつとゆつくり細かに書きたいのですが私は非常に忙しくてとてもそんなにひまがありませんから大ざつぱに申します。不可解な點が御座いましたら何卒また仰云つて下さいまし。

先づ根本からあなたの仰云つたこと、私たちの考へ方の違つた點を云はして下さいまし。それは私たちが社會を敵と心得てゐると仰云つたことがその一つ、それから、あなたは、また社會問題に對してわけもなく熱烈になると云ふことを考へてゐらつしやることがその一つでございます。私は何時も社會の權威のない舊道徳や習俗は惡んでゐます。併し社會そのものは惡みもしませんしい、ものだとも思ひませんたゞ社會制度さ云ふもの、うるさいことや厄介なこさは思ひます。それはかう云ふ社會組織になつてゐればどうしてもそれと交渉なしには生きてゆけないことを知つてゐるからで御座います。社會問題と云つても社會自身は私たちにさつては實に無意味な問題にならないものに思ひます。たゞそれが自分の生活に觸はつて來る時にはじめて問題になるのです。これは私の偏した考へかもしれませんから一般の人がさうだとは云ひません今の場合私丈けはさうです。あなた方のお目からは可なり極端に見えるかもしれませんけれども私にとつては何をするのにも自分の要求から出たことでなくては滿足が出來ません、つまり自分の爲めでなくては本當のことでないと信じてゐます、自分の本來の心から出たことと他動的な事との差はその熱情の點に於てまた力の點に於て、忍耐の點に於て大きな懸隔があるとはお思ひになりませんか、所謂社會の爲めの社會改良さ自分の爲めの社會改良とかう並べて見ますとその差は殊によくわかります。あなたは矢張り普通な意味の社會本位の社會改良者たるこさを私たちにすゝめてゐらつしやるやうです。個人主義と云ふことはあなたのお目からは本當に小さな狹いものにしか見えないやうですね。本當の個人主義はあなたの考へてゐらつしやるやうな小さな狹い究屈な相對的のものではなくて絕對の上にたつた自由な廣大無限なものであることを御承知下さい。

あなたが私共の態度について不滿にお思ひになつたことは一々尤もだと私は思つてゐます。それは私たち自身

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

でも氣がついてゐるのです。併しあなたはまだ本當に私たちの生活を御存じなかつたのです。私たちがどんな狹い究屈な處におかれたかを考へて下さらなかつたのですあなたは私たちが自分のことばかりに沒頭してゐると云つて憤慨なさいましたけれど私たちはそれを餘義なくされたのです。あなたはある出發點からある處までゆきつくのに相當の時間と努力を要することは御存知で御ざいませうね、私たちはまだこれで自分自身の內に遺傳的にまじつてゐるいろいろな習俗のためになやまされてゐます。それだけまだ私たちは解放されてゐません。まだ私たちの內部の爭鬪がつゞいてゐます。私たちはその爲めにはあらゆる熱情を殺して冷靜にならなくてはならないのです。私たちのあらゆる情緖の中に遺傳的な習俗は深く喰ひ入つてゐます。先づそれを驅除することが一番最初の私たちの戰ひなのです。その最初の戰ひがまだ續いてゐます。私たちはその爲めにどの位苦しい努力をしてゐるかわからない程です。それでもあなたはそんな事はいゝかげんにして先へ進めと仰云るのですか。私はそんなことして先へ進んで進みながら始終自分の內訌を堪えてゆかなければないやうなことをしたくはありません。私は自分の步くべき道は一步々々しつかりと步きたいとおもひます。あはただしい覺束ない步みをしたくはありません。これ丈け申しあげましたから大抵もう私たちがまだ外面的な仕事をする迄に至らない事がおわかりになりましたでせうね、そして私はあなたがこの號に私の書いた「人間と云ふ意識」をお讀み下さることを希望いたします。あれは私には極めて明瞭にわかつてゐるのですか他の人にはどうかと懸念するのですがあれは私の氣持のかはり目を書いたのです。つまり私が自分丈けのことゝして考へてゐたことが漸く人間の問題として社會問題と云ふ本流に流れ込んだのを意識したのでそのまゝを書いたのです。可なり抽象的ですから他人にはわかりかねるだらうと思ひます。けれども私が社會問題を自分の問題として考へることの出來るやうになつたと云ふことをおわかり下さればいゝのです。私のこの心持がどう云ふ方面に向つて流れて行くか今の處ではわかりませんけれどまだ私はある種の運動を起すほどにはなつてゐません。

私の本當のねがいは私をして眞の社會的な運動を起さないではゐられない程の大きな激しい刺戟と熱情とを欲してゐるのです。併し今の處まづさう云ふことは空想に屬してゐます。併し何時私の上に急激な變化が來て身命を賭すやうなことがないとも限りません。兎に角今私にはそれ程強い要求が起らないからです。他の一つの理由は私自身にさう云ふ與へられた天分の在否を疑ふ點も多少まじつてゐるのです。

最後にもう一つ申ます。世間多くの人たちは私共がさ

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

も先導者であるが如く云つてゐますが――勿論あなたもさう信じてお出になるらしい。――私共少くとも私丈けはまた自分以外の人に對してさう迄積極的な氣持ちにはなつてゐません。無論自分の書いたものを發表するのは或程度までの同感を呼ぶことが出來てそれが多少なりともその人の自覺の緒と心もなればと云ふ程の心持ちはありますがそれをもつて指導するなど云ふ大した心持ちでないことは御承知下さいまし、從つて私たちの內部に向つての考察が外部に向つて働くやうになつてもあくまで私は自己中心であることを申して置きます。一人の一步の前進は全人類の一步前進したのと同じだと云ふ理屈から私はあなたの仰云る賣淫問題ださかその他何々問題など云ふ枝葉の問題についていくら何をやつてもそれは無駄だとおもひます。先づ根本から改革してゆかなければ何の功果もありません。婦人問題と云ふよりも私はまだ人間問題の方が先決問題だと思ひます。私の漸く社會と云ふものに向つてあいて來た目は久しい以前から私の心の隅にちゞこまつてゐたものと一緒に個人主義を根底としたアナーキズムに向つてあるものをもとめやうとしてゐます。まだ私は申あげたいこさを澤山もつてゐますが、時間がありませんし頁にも制限がありますから或はまた興がのつたら來月號でもう少し云はして頂くかもしれませんが今度のさころ先づこの位で止めておきます。

何だか云ふことに秩序がたつてゐないやうでおわかりになるまいかと一寸不安な氣もしますが少々骨を折つてもおわかり下さることをおねがいいたします。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

編輯室より

□永い間不如意な經濟の遣繰りや方々の書店との交渉やそれからまだ外の細々した面倒な仕事と雜誌の編輯で疲れきつたらいてう氏は十月十二日に千葉縣の御宿村へ行つた。後に殘された私はそれ等の仕事をすつかりしなければならなかつた。二ケ月位はどんな苦しいことでも忍ぶ義務があるとらいてう氏は十一日に私が社に行つたときに笑ひ笑ひ云つた。私も苦しむでも仕方がないと思つた。

□けれども實際やらなければならないとなつて見ると大變だ。私はすつかりまごついてしまつた。相談する人もない。加勢をたのむ人もない。こんな時に哥津ちやんでもゐてくれるとなど愚痴つぽいことも考へる。廣告をとりにゆく、原稿をえらぶ、印刷所にゆく、紙屋にゆく、そうして外出しつけない私はつかれきつて歸つて來る、お腹をすかした子供が待つてゐる、机の上には食ふ爲めの無味な仕事がまつてゐる。ひまひまを見ては洗濯もせねばならず食事のことも考へねばならず、校正も來ると云ふ有樣、本當にまごついてしまつた。その上に印刷所の引越しがあるし雜誌はすつかり後れそうになつてしまつた。廣告は一つも貰へないで嘲笑や侮蔑は澤山貰つた。私はすべてのことを投げ出したくなつてしまつた。

□そんな譯なのでこの號は本當に間がぬけ、手落ちがあるけれどこの號丈けはどなたにもがまんして頂きたい。その代りに來月號はもう少し一生懸命にやります。交換廣告も此度はすつかり止しました。原稿をお送り下すつた方には此處でおわびいたします。

□安田皐月さんが白山前町三八に水菓店を開業なさいました。皐月さんの愛嬌がい丶爲めか繁昌してゐます。果物もたいへん結構です。殊に林檎や梨は本場の一粒選りださうです、少々遠くても品物を持つて賣りにお出掛けになるそうですから何卒皆さまお得意になつて下さいまし。

□哥津ちやんから何か頂ける筈でしたが今月は駄目でした來月號には屹度おかき下さるさうです。私も何か長いものを書く氣でゐました處前のやうなわけで忙しくて遂々書けませんでした。子供のお守りの時間を利用して書くのですからなか〳〵まとまつたものも書けません、來月號には屹度この編輯が濟み次第書いて置くつもりです。

□大杉荒畑兩氏の平民新聞が出るか出ないうちに發賣禁止になりました。あの十頁の紙にどれ丈けの尊いものが費されてあるかを思ひますと涙せずにはゐられません、兩氏の強いあの意氣組みと厚い熱情に私は人しれず尊敬の念を捧げてゐた一人で御座います。ふとして

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

私は新聞を讀むことが出來ました。

□兩氏の偉大なる熱情と力が全紙面に躍動してゐるのがはつきり感じられる、そしてそれは主として勞働者の自覺についてゞある。私は書かれた理屈が勞働者ばかりについてゞなくすべての人の上に云はるべきものであると思ふ。そしてそれが勞働者についてのみ云はるゝときに限つて何故所謂その筋の忌憚にふれるのか怪しまないではゐられない。あたり前なことゝ云つて教へることが何故にいけないことなのだらう、私は此處に出來ることならその一部丈けでも紹介したいけれどもあの十頁すべてが忌憚に觸れたのださうだ。だからまた轉載した罪をもつて傍杖でも食ふやうな事になると折角私が骨折つて働いたのが無駄になるから止めて置く。けれども人杉荒畑兩氏には心から同情いたします。何だか空々しく變に聞えますが今の處他に言葉が見あたりませせせんから。

□寄贈の書籍がありますが一々讀んでゐるひまがありませんので今月號では殘念ながら御紹介が出來ません、來月は私がもし駄目のやうでしたら御宿に送つて平塚氏にでも書いて頂いて是非紹介いたします。何卒あしからず御承知下さいまし—御寄贈下さつた方々に——

□本當に手落ちばかりで申譯けがありません終りにもう一度平身低頭お詫びを申して置きます、

青鞜社概則

第一條　本社は女子の覺醒を促し、各自の天賦の特性を發揮せしめ、他日女流の天才を生まむ事を目的とす。

第二條　本社を青鞜社と稱す

第三條　本社の事務所を東京府下巣鴨町一ノ一六三に置く

第四條　本社は係員、社員、賛助員よりなる。

第五條　本社の目的を達する爲め左の事業をなす。

一、毎月一回機關雜誌青鞜を發刊すること。「青鞜」には係員、社員、賛助員の生活及思想を發表す。(但し補助團員の寄稿を發表することあるべし。

一、圖書出版

一、時々係員、社員の修養及研究會、並に事業上の相談會を開くこと。

(但し賛助員は出席隨意たるべし)

一、毎年一回大會を開くこと、大會には賛助員を招待し講話を請ふことあるべし。

一、時に旅行を催すこと。

一、本社の事業を達するため別に補助團を組織す。

第六條　係員、社員、賛助員は女子に限る。

第七條　係員は本社の目的に賛同するのみならず。本社の事業を自己の生命とするものにして專ら幹部にありて、直接本社の事業に從事し。自己にその責任を負ふものとす。係員は毎月「青鞜」の配布を受く。

第八條　係員は在京社員の中より選擧す。

第九條　係員は四人とし、内二名は經營に、他の二名は編輯に從事す。

第十條　毎年九月在京社員會議を開き、係員を改選す。但し再選することを得

第十一條　係員には本社の經濟の許す限りは其勞力に對して多少の報酬をなすものとす。

第十二條　社員は本社の目的に贊同するのみならず本社の事業を自己の生命とするものにして雜誌「青鞜」の配布を受く。

第十三條　社員たらむことを希望する者は住所、姓名、年齡の外に履歴の大體と現在の境遇と入社の動機に十枚以上の原稿と(小說、戲曲、感想、詩歌、評論、飜譯いづれにてもよろし。)最近の寫眞とを添へ本社宛申し込まるべし。

第十四條　賛助員は本社の目的に贊同し、雜誌「青鞜」に寄稿することを快諾せられたる文壇の諸先輩とす。賛助員は毎月青鞜の配布を受く。

第十五條　本社の事業を經濟的方面より助力するものを補助團員とす。

第十六條　補助團員は補助團規約によつて募集す。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

雜誌規定

■每月一回一日發行
■定價一册金貳拾五錢（郵稅壹錢五厘）
■前金購讀料（四ヶ月分）壹圓（六ヶ月分）壹圓五拾錢（八ヶ月分）貳圓（十ヶ月分）貳圓五拾錢（一ヶ年分）參圓
■廣告料（一頁）特三十五圓、一等二十圓、二等十五圓、三等十圓、（半頁）七圓
■振替貯金口座は（東京二一一六青鞜社）に拂込まれたし。
■郵劵代用は一錢切手に限る（但し一割增のこと）。
■編輯事務、圖書雜誌、補助團會費拂込、廣告申込、交換廣告は青鞜社へ。
■雜誌購讀に關する一切の事務は青鞜社へ。
■原稿〆切期日は每月十日限とす。

大正三年十月廿五日印刷納本
大正三年十一月一日發行

禁轉載

東京府下巣鴨上駒込四一一
青鞜社內
編輯兼發行人　中野初

東京市神田區西小川町二丁目六番地
印刷人　篠田玉三

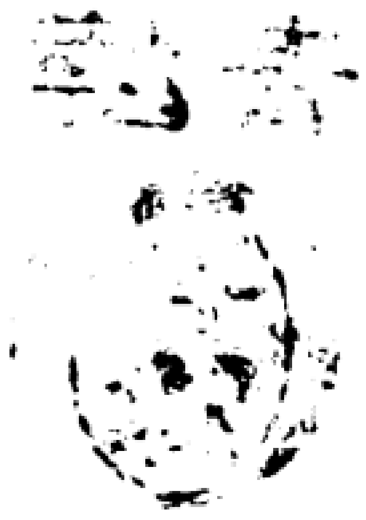
東京市神田區西小川町二丁目六番地
印刷所　大精社

發行所　東京府下巣鴨上駒込四一一　青鞜社　振替東京二一一六番

發賣所　神田表神保町三番地　東京堂　電話本局四五六一番　振替東京二七〇番

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER



昭和45年5月30日発行　【第9回配本】

青 鞜 第 4 巻　11月号

編著者　平塚　らいてう
発行者　藤原正人
発行所　(株)明治文献
印刷　江明印刷
製本　(株)三高製本

【分売はいたしません】　定価 4,500円

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

ASN
PER
PL
756
S45
V.4
no.10

University of Colorado at Boulde[redacted]

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

明治四十四年八月二十八日第三種郵便物認可　第四巻　第十號
大正三年十一月一日發行（毎月一回一日發行）
青鞜

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

大正三年十二月一日發行（毎月一回一日發行）第十一號

青鞜

十二月號

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF COLORADO BOULDER